

資料

(平成二十三年十二月)

第五十六回 「合宿教室」 (江田島) 感想文集

日本人としての自覚をもとめて

社団法人 国民文化研究会

第五十六回 “合宿教室（江田島）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成二十三年八月十九日（金）から二十二日（月）まで三泊四日間
 ところ 広島県江田島市「国立江田島青少年交流の家」
 参加総数 一四一名

目次

“はしがき” に代へて	理事長 上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳		4
“合宿教室” 56年の歩み		5
“合宿教室” の日程表（三泊四日）		7
第56回 “合宿教室” のあらまし		8
走り書きの “感想文” と第二回目の “短歌詠草”	参加者全員	25
合宿中に創作された「短歌詠草」	参加者全員	75
あとがき		90
カメラ・レポート22枚（27ページから69ページの左頁に掲載）		

「はしがき」に代へて

(社)国民文化研究会理事長(東海ゴム工業(株)顧問)

上村和男

昭和三十一年(一九五六年)の本会創立以来、毎年八月に、一年もかかさず続けてまいりましたこの「全国学生青年合宿教室」は今年で第五十六回になります。

今年は、未曾有の東日本大震災で開催が危ぶまれましたが、無事「国立江田島青少年交流の家」(広島県江田島市)で八月十九日から二十二日までの三泊四日の「合宿教室」を開催致しました。「江田島で歴史を学ぼう」との呼び掛けに、北は北海道から南は鹿児島まで多くの参加者が集まってきました。(総数一四一名)

江田島は海軍兵学校があつた所で、ここで教育を受けた多くの優秀な将官と士官が日露戦争をはじめ今次の大東亜戦争において、我が国の平和と国民の倅せを願ひつつ散華されました。さうした方々の遺書や遺物が現在「教育参考館」に展示されてゐて、それらを眼にすると涙を催ほします。

今年は大東亜戦争開戦七十周年ですが、何故日米が戦つたのか、そして日本が有史以来初めて敗れたこと、連合国の占領下におかれ、当時の呪縛からいまだに逃れられないのであること、などを知らない世代が多くなつてきているのが今日の状況であります。

占領政策によつて失なはれた日本人の歴史と文化伝統を取り戻し、日本が独立国として誇りを持つて世界に勇躍できる基盤を作るべく、本会の創始者である先生方は、日本人が二千年にわたつて護り続けてきた皇室や、日本の歴史・文化伝統を否定する、いはゆる進歩的文化人・学者や、殊に教職員組合である日教組の活動に対し、真向から立向かつて、日本を守つてこられました。祖国を愛さず、祖国の為に盡さうとしない国民が多ければ、やがてその国は亡びることを歴史が証明してをります

今回講師としてお招きしました東京大学名誉教授で本会の顧問でもある小堀桂一郎先生から、「歴史に学ぶ『公』と『私』の

関係」と題する御講義を賜りました。御講義に入る前に先生は、今回の東日本大震災の折りに、海外のメディアが驚愕した、日本人の助け合ひの精神について、『占領政策によりバラバラの個人に引き裂かうとする反国家的教育が長く続けられてきたが、東北地方の人々の間には伝統的な「公」と「私」の正しい関係が今も生きてゐることが実際に示された』と話され、御講義では『聖徳太子の十七条憲法は「おほやけ（公）」と「おほみたから（民）」のあるべき姿を高い次元で示されたものである』との貴重な御指摘をいただきました。

さて、この三泊四日の「合宿教室」では今年も班別研修や和歌相互批評を通じて、また、起居を共にすることによつて、見ず知らずの友が心を開き、そこに真の友情の世界が実現され、他の人の心を大事にする情念が培はれました。

なほ、ここに編じたこの「感想文集」は、合宿最後の帰り際に走り書きで書かれたものです。充分意を盡せないものではありませんが、今の日本の政治・経済のただならぬ行き詰まり状況に当面してゐる中で、精魂を傾けて過ごした日々を経験を書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文をそのまま載せ得ないのが残念ですが何卒ご容赦ください。

この文集全体の編集に、十余名の会員が休日をさいて取組んでくれました。また、この合宿を運営された運営委員長の飯島隆史さんをはじめ、運営委員の方々、指揮班長の横畑雄基さんをはじめ、指揮班の方々のご苦勞にも心からの謝意を表します。

最後になりましたが、この合宿教室事業を行ふに当たり、本年もまた、各界からお寄せ下さつた得難いご支援の数々に対し、会員一同に代り、心から厚く御禮申しあげます。

来年（平成二十四年）の「第五十七回合宿教室」は八月十六日（木）～十九日（日）の三泊四日間、熊本県阿蘇市「国立阿蘇青少年交流の家」で開催します。

詳細の合宿案内パンフレットは来年三月ごろ配布予定です。多数の皆様のご参加をお待ちいたします。



第56回全国学生青年合宿教室（平成23年8月19日～22日） 於「国立江田島青少年交流の家」

参加者

(学生班) (算用数字は参加学生数)

北海道大学1 埼玉大学1 千葉大学1 東京大学2

東京工大1 青山学院大1 明治大学1 慶應義塾大学1

拓殖大学2 国学院大学1 成蹊大学1 中央大学1

専修大学1 共立女子大学1 聖心女子大学1 神奈川大学1

富山大学1 鳥取大学1 文京学院大学1 山口大学2

山口東京理科大学1 九州工業大学3 福岡大学11

九州大学1 中村学園大学3 佐賀大学1 立命館大学1

宮城県仙台第二高等学校1

アメリカンスクール・イン・ジャパン高等学校1

計 四十六名 (うち女子十三名)

(社会人参加者) 三十二名 (うち女子十二名)

(招聘講師) 一名

(国民文化研究会) 五十一名

(事務局・アルバイト) 七名

(見学者・慰霊祭協力) 四名

総計 一四一名

— “合宿教室” 56年の歩み—

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧 島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
55	〃 22年	阿 蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	〃 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
累計・参加人員				14,300名

第56回(平成23年)全国学生青年“合宿教室”日程表(江田島)

	8月19日(金)	8月20日(土)	8月21日(日)	8月22日(月)	
6:00		起床(6:00)	起床(6:00)	起床(6:00)	6:00
		(6:30) 朝の集ひ(国文研)	(6:30) 朝の集ひ(国文研)	(6:30) 朝の集ひ(国文研)	
7:00		(7:10) 朝の集ひ(合宿所) 掃除	(7:10) 朝の集ひ(合宿所) 掃除	(7:10) 朝の集ひ(合宿所) 掃除	7:00
		(7:50) 朝食	(7:50) 朝食	(7:50) 朝食	
		(8:30) 講義 「歴史に学ぶ『公』と『私』の関わり」 東京大学 名誉教授 小堀柱一 先生	(9:00) 講義 「日本歴史の特性」 拓殖大学日本文化研究所 客員教授 山内健生 先生	(8:30) 合宿を顧みて 国民文化研究会 今林賢郁 副理事長 飯島隆史 合宿運営委員長	8:00
9:00		(10:00) 質疑応答	(10:30) 班別研修	(9:00) 全体感想発表	9:00
		(10:30) 写真撮影	(10:30) 班別研修	(10:00) 地区別懇談	
		(10:50) 班別研修	(10:50) 班別研修	(10:30) 班別懇談・感想文記入	
	受付: 12:30 開始 開会式: 14:00 開始	(11:50) 昼食	(12:00) 昼食	(11:30) 閉会式 (挨拶) 国民文化研究会 講員 保博 副理事長	11:00
	(14:00) 開会式 (挨拶) 国民文化研究会 上村和男 理事長 オリエンテーション 合宿趣旨説明及び諸注意伝達 飯島隆史 合宿運営委員長 横畑雄基 合宿指揮班長	(12:40) 野外研修 (カッター研修, 教育参考館見学) 第一回短歌創作	(13:00) 学生体験発表 福岡大学4年 岡松侑希 君 東京大学3年 高木 悠 君	(12:00) ※終了後、合宿所よりご挨拶	12:00
	(15:00) オリエンテーション(合宿所より)		(14:30) 創作短歌全体批評 国民文化研究会 参与 折田豊生 先生	解散	13:00
	(15:30) (休憩)				
	(15:40) 合宿導入講義 「ソクラテスと吉田松陰」 一魂の世話をするといふこと (株) 寺子屋モデル 世話役 講師 頭 廣木 肇 先生		班別短歌相互批評		14:00
	(17:10) 自己紹介・班別研修	(17:00) 夕食 入浴 休憩	(17:30) 夕食 入浴 休憩		15:00
	(18:40) 夕食 入浴 休憩		(19:00) 慰霊祭説明 元 新潟工科大学 教授 大岡 弘 先生		16:00
		(19:30) 古典講義 「古事記-仁徳天皇の巻-」 昭和三楽大学 名誉教授 園武忠彦 先生	(19:30) 慰霊祭 (移動10分)		17:00
		(21:00) 班別研修	(20:20) 班別研修 (移動10分)		18:00
	(21:30) 短歌導入講義 山口県立熊毛南高等学校 教諭 宝辺矢太郎 先生		(21:30) 夜の集ひ		19:00
	(22:30) 班別研修	(22:30) 就寝	(22:30) 就寝		20:00
					21:00
					22:00
					23:00
					23:30

第五十六回 “合宿教室” のあらまし

第一日目

(八月十九日・金曜日)

第五十六回全国学生青年合宿教室は、広島県江田島市「国立江田島青少年交流の家」にて開催された。瀬戸内海を遠く望む高い山の緑に囲まれた素晴らしい環境のもと、三泊四日の合宿教室は始まった。北は北海道から南は九州に至る全国各地から学生・社会人が次々と参集した。おのおの受付を済せると宿泊棟の班室に入り、初めて顔を合せる班員と挨拶を交して直ちに開会式に臨んだ。

開会式

九州工業大学大学院一年小林達郎君の力強い開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して上村和男理事長は「豊かになった今日、見失ったものは何か。それは積極的に物事に挑戦する意欲であり、自分の頭でものを考へる力であり、さらには日本の文化伝統への愛情である、今のわが国に最も欠けてゐるものは国家観である」と問題提起をしつつ、「これらについて考へ、気付き、目覚め、そして各自が奮起するやうな合宿にして欲しい」と挨拶した。次いで九州工業大学情報工学部四年大森淳史君は「この合宿では心に残る言葉を見つけない。互ひに心に残った言葉を語り合ひたい。皆さんも是非、それを班員に伝えて下さい。充実し

た合宿になるやうに心を尽して取組みませう」と呼び掛けた。

合宿導入講義 「ソクラテスと吉田松陰―魂の世話をするといふこと―」

（株）寺子屋モデル講師頭 廣木 寧 先生



初めに、陽明学者安岡正篤氏の「何か心霊に響く感動の氣を得て、それからそれへと縁に随って、自ら学問求道しなければ、真に自己を開発することは難しい」「縁を尋ねて古聖先賢の学道に参じたことに深甚な恩恵を覚える」との文章を引用され、「この合宿では先人の遺した文章を味読し、その生き方に学ぶ生き方を学んで欲しい」と述べられた。

ギリシャの哲学者ソクラテスと幕末の尊王論者で思想家の吉田松陰について、プラトンの著書や松陰自身の言葉で詳しく紹介された。『プロタゴラス』では、若いヒッポクラテスが「魂」までも簡単に他人に委ねかねない一説に触れられ、「同じことが現代の我々にも言へるのではないだろうか」と問はれ、「自らの魂の世話をするといふことは正しく生き正しく学問をするといふことである」と説かれた。また『バイドン』の文章を詳説され、ソクラテスの「死生観」には松陰のそれと相通じるものがあると指摘され、松陰の『留魂録』にある辞世「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」の歌や言葉を味ひ、さらに二人の「学問と人生観」は江戸後期の儒学者大塩平八郎の「身の死するを恐れず、ただ心の死するを恐るるなり」との生き方をも想起させるものがあると述べられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ、講義を聴いて班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて話し合ひ、講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、そのうへで各々の思ふことを論じた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせるか、初めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時に反論し時に共感し合ひながら、

班員相互の交流が深められていった。

短歌創作導入講義

山口県立熊毛南高等学校教諭 寶 邊 矢太郎 先生



冒頭で、「短歌を上手く作らうなどと余計なことを考へてはいけない、感動したことを素直に正確に五七五七七の三十一文字に詠むことが大切である」と述べ、実例として二十九年前の第二十七回合宿教室で学生が詠んだ歌を紹介された。その折の合宿導入講義で山田輝彦先生（福岡教育大学教授）が取り上げられた「日本海々戦」直前の電文にまつはる連作短歌四首は、「三十年ほど前に一度耳にしただけなのに、一首目《まちにまちし敵艦見ゆとの警報はつひにきたりぬタタタ、タタタタと》の結句「タタタ、タタタタと」の八字八音の響きは今でも忘れることができない。字余りも気にならない。講義をお聴きした際の作者の感動が素直に詠まれてゐるから、作者の心持ちが波打つやうに私に伝はってきたのだ」と語られ、短歌創作の要諦が「自分の気持を正直に正確に一首一文で表現する」ことにあると話された。「お話したことに従ってお作りになれば必ず自分の短歌ができる」と強調された。

第二日目

（八月二十日・土曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青少年交流の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行われた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後体操を行って一日の研修を新たに迎へた。

合同の集ひのあと、合宿参加者には毎朝一枚、唱歌のプリントが配布され、歌の紹介と皆での合唱が行われた。各唱歌は次の

通りである。

二日目（八月二十日）「われは海の子」

三日目（八月二十一日）「江田島健児の歌」

四日目（八月二十二日）「螢の光」

講義 「歴史に学ぶ『公』と『私』の関係」

東京大学名誉教授 小堀 桂一郎 先生



先生は、初めに、三月の東日本大震災の折に、海外メディアを驚愕させた日本人の協心協和の絆に触れられ、「戦後占領下での教育基本法の制定以来、人間をバラバラの個人とみなす反国家的教育が長く続けられてきたが、東北地方の人々の間に伝統的な公と私の正しい関係が今も生きてゐることが実際に示された」と語られた。

そして、わが国における「公と私」の社会秩序の成立について、天の岩戸神話におけるスサノヲノミコトを巡る展開から、「農業生産に直結する共同体秩序の破壊を古代人が重い罪と考へてゐたことが読み取れる」とされ、「共に働き助け合ふことで成り立つ村落共同体は支那では成立しなかつた。そこにあるのは専制君主とその支配下にある土地と人民であつて、村落共同体ではない。米国も似てゐる」、「四季が規則正しく循環する日本の風土においては、共同での農作業が収穫を増やすためにも重要であり、そこに各人の運命の共有性が認識された。かうした共通性を古代の人はおほやけ（公）と呼んだ」と説かれ、さらに「おほやけ」の語の用例を『日本書紀』の記述に辿られた。

先生は、聖徳太子の十七条憲法は「おほやけ（公）」と「おほみたから（民）」のあるべき姿を高い次元で示されたものであり、「人間の内部にある私利私欲の罪深さに対する洞察が太子の思想の中核をなしてゐた」、「第十条の《人皆心有り、心各執ること

有り」の一節は古今東西の古典を通じて最高で、簡潔明快な人間認識の表現である」と語られた。さらに幾つかの条文を取り上げられ、「和」の下に生れる理、嫉妬の不毛性、天地の關係に譬へた自然的秩序觀などに解説を加へられた。そして「日本の民が力を合はせて生業に勤しんで生きてゆく、その結末の大本が公であり、民は私有民ではなく、公の民（おほみたから）であった」と説かれ、「この民の保護者であった公（朝廷）の力が衰へて交代した武家政治も、公の代行者としての役割を奉じて民の保護者の役を担ふものであった」と国史を回顧された。

講義後の質疑応答の中で、先生は明治以降の自由民権思想の流入が公私の緊張關係を生み、公に尽くす伝統と相俟つてむしろ日本の国を強い国にしたと指摘された。

野外研修（短歌創作）

短歌創作を兼ねた野外研修は江田島の地に相應しい「カッター」研修と「教育参考館」見学の二手に分れて行はれた。

「カッター」研修は各艇に定員（二十三名程）があり体力的年齢的な制約もあつたが希望者全員の参加で実施された。指導員は地元の自衛隊OBで、「駆け足で集合しろ、私語をするな」との厳しい口調に参加者の表情が一変するほどだった。艇庫内で約四十分の規律訓練の後、カッターの仕組みを学び海に出た。参加者は重さ約七キロのオール（中高生用）を握り「ソーレ」「ソーレ」と声を掛け合ひながら漕いだ。掛け声が一つになり、オールが揃つたとき、カッターはグイグイと進んだ。海上での演習は約一時間だったが、他者と呼吸を揃へることの意味合ひを体感した研修となつた。

「教育参考館」見学では、幕末期以降の海軍関係者の墨跡や特攻隊員の遺書などの展示品を拝観するとともに、海軍兵学校の佇まひを偲びながら二時間余を過した。現在は海上自衛隊幹部候補生学校・第一術科学校となつてをり、白い制服に身を包んだ隊員の一団が行進してゐた。近代日本を支へた海の防人達の苦闘を心静かに偲ぶ時間であつた（なほ、「教育参考館」見学を希望する「カッター」研修参加者向けに、閉会式後、教育参考館行きのバスが手配された）。



初めに「仁徳天皇については大きな前方後円墳の御陵で有名だが、どのやうな天皇なのかは誰も知らない。教科書にも載ってゐない。そこで『古事記』を繙いて、どのやうに記されてゐるか。一緒に読んでいきたい」と述べ、「今日のやうな形で『古事記』を読むことができるのは江戸後期の国学者・本居宣長が長年の研究の結果、『古事記伝』を著したことによる。宣長は「真心」を失はなければ神の意志にかなった生活ができると信じたのだ」と語られた。

次に『古事記』の記述を辿りつつ、「仁徳天皇は農業生産を安定させ発展させて百姓を豊かにするために治水や干拓事業、運河や港の工事などに取組まれたが、その根底には稔りの豊かさを予祝する《国見》といふ重要なお務めがあった。国民のことを一番良くお知り（日知）になられてゐたからこそ、「聖帝」と呼ばれた」と指摘された。

続いて仁徳天皇の皇后「石の比売の命」の心情を宣長の註釈を引用しつつ説明された。特に皇后が新嘗祭の準備で遠出の間に、「八田の若郎女」に靡いた天皇に激しい恨みと怒りの情を抱き、失望して故郷に向け船で山代河をのぼるうちに天皇への深い思慕を覚え、つひには再び都へと戻る決意をされる、その皇后の心の動きを二首の歌から偲ばれた。「オペラに作詞作曲して上演したくなるほどの心の真実が、ここには描かれてゐる」と『古事記』の魅力が語られた。最後に「宣長の『古事記』に対する愛情はたいへん深く、石の比売の命を語るにしても、その註釈は皇后様の心に寄り添ふものであった」と講義を結ばれた。

講義 「日本歴史の特性」

拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内 健生 先生



冒頭、わが国が現在抱へる問題点のいくつかを列挙され、その中で「世界広しと言へども、自国の領土領海を守るための法整備を求めて国民が署名運動をしなければならない国が他にあるであらうか」と、尖閣諸島防衛に政府が及び腰の現状に目を向けて欲しいと説かれた。そして「被占領期に押し付けられた武装解除憲法を《平和憲法》と呼んで、日本は《悪しき国家》から《平和国家》に生れ変わったとする国の連続性を否定する観念が行き渡ったため、日本歴史の最も大きな特色である《古代的なものが生き続ける歴史的國家》といふ大事な側面が無視されてゐる」とされ、「自国イメージを《平和的民主的國家》から《歴史的な伝統國家》へと転換しなければならない。そこからしか日本の底力は生まれてこない」と述べられた。

「日本には現存世界最古の木造建築である法隆寺（七世紀建立からの連続性）がある一方で、伊勢神宮の式年遷宮のやうに二十年ごとに全てを造り替へることを繰り返して平成二十五年に六十二回目を迎へるといふ連続性がある」、「百二十五代の今上天皇は毎年、神武天皇祭にご奉仕されて初代天皇の御偉業を偲ばれてゐる。そして昭和天皇祭・大正天皇祭・明治天皇祭・孝明天皇祭を毎年営まれてをられる。さらにそれ以前の御歴代は百年ごとに式年祭を、例へば昨年は東山天皇三百年祭、反正天皇千六百年祭、孝安天皇二千三百年祭、応神天皇千七百年祭を厳修されてをられる。これがわが国にしかない《万世一系》の真の姿である」と説かれた。そして歴代天皇の御製に触れつつ「この御系譜の直系は《国安かれ民安かれの祈りの一系》でもあることに気付いて欲しい。連綿と続く祈りの延長上に憲法第一条がある」と結ばれた。

福岡大学経済学部四年 岡松 侑 希 君



学内サークル《寺子屋学習塾》に参加した経験を語った。「最初は難しいとしか感じなかったが、それでも輪読を四年間続けることができたのは、偉人の生き方やその言葉に感じるものがあつたからだと思ふ。中江藤樹がある言葉に出会って叫び泣くほどに感動したといふエピソードを知った時、自分もそのやうな言葉に出会ひたいものだと思った」とサークル活動を振り返り「これからはさらに言葉から感じたものが日々の生活に生かされるやうに努めていきたい」と抱負を語った。

東京大学理学部三年 高 木 悠 君



寮生活を送る中で感じてゐることにふれ、「昨年、学生寮《正大寮》が再開されると聞き、寝食を共にする者同士が本音で語り合ふ生活に惹かれて入寮した。一年近い山中利郎君（埼玉大教養三年）との寮生活で、自分の気持ちを素直に言葉にできてゐない自分に気づかされたり、心から語り合ふことの大切さを学んだりしてゐる。寮は定期的な勉強会の場にもなつてゐる」と語った。そして「寮生を募つてゐるので、関東地区の男子学生にはぜひ一考を願ひたい」と入寮を呼び掛けた。

国民文化研究会参与 折田 豊生 先生



も紹介された。

最後に、「言葉遣ひが正確でないと正しく思索できない。表現する力と読み取る力は同じなので、日頃から短歌創作と輪読で、一段上の自分をめざして言葉を鍛へて欲しい」と説かれ、「短歌が身近なものになれば、史上に残る無尽蔵の短歌を通して日本歴史の広やかな世界に分け入ることができる」と述べられた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にしようと尽力し時間を超過してしまふ班も多くあったが、その分自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

慰霊祭

齋行に先立ち元新潟工科大学教授大岡弘先生（本会理事）から、慰霊祭齋行の趣旨と祭儀の手順が説明された。慰霊祭の趣旨について「遠き古より今日に至るまで、戦時・平時を問はず、『祖国日本』のために尊い命を捧げられた全ての先祖のみ霊をお招き申し上げ、ご馳走をお供へして、おもてなしをすること」であると説かれ、さらに「豊かな日本の文化に浴することのできる幸せを、祖先のみ霊に感謝申し上げ、自らも祖先の方々のみ跡に続いて行かうとの気持ちで新たに、決意を固める祭りである」と言葉を重ねられた。

慰霊祭は宿舎から徒歩三―四分ほどの屋外に設けられた齋庭で厳修された。祓詞に代へて山口秀範常務理事による、三井甲之詠の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の朗詠に始まり、小野吉宣参与による御製拝誦、岩越豊雄理事による祭詞奏上と続き、次いで参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。心配された雨も直前に上り、心地よき夜風の中で、祭儀は古式を尊びつつ厳かに齋行された。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭文」である。

御製拝誦

明治天皇御製

述懐（明治四十五年）

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり

をりにふれたる（明治三十年）

この秋は庭にもいはずたまだれのをがめのうちの菊をこそみれ

社頭祈世（明治二十三年）

ちはやふる神ぞ知るらむ民のため世をやすかれと祈る心は

道 (明治三十六年)

ちはやぶる神のひらきし道をまたひらくは人の力なりけり

をりにふれたる (明治四十五年)

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

夜学 (明治三十五年)

ながき夜のふけわたるまでわらはべがふみよむ声のたえずきこゆる

をりにふれたる (明治三十七年)

つはものはいかに暑さを凌ぐらむ水にともしといふところにて

光陰如矢 (明治三十七年)

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に

仁 (明治三十七年)

国のためあたなすあたはくだくともいつくしむべきことな忘れそ

寶 (明治三十七年)

あしはらの国富まさむとおもふにも青人草ぞたからなりける

昭和天皇御製

母 (昭和五十三年)

母宮のひろひたまへるまでばしひ焼きてただけり秋のみそのに

今上天皇御製

歳旦祭 (平成十八年)

明け初むる賢所の庭の面は雪積む中にかがり火赤し

祭文

われら、ここ、万葉の御代、天智天皇の御歌

わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜さやけかりこそ

など、船で行きかふ折に多くの名歌の生まれし瀬戸内の海に浮かぶ江田島に集ひ、第五十六回全国学生青年合宿教室参加者一同二四一名、共に学びて、早、三日目の夜を迎へぬ。

今し、天つ日はかくろい、夜のしじまに包まれて、今宵、大海の辺の広庭を齋庭（いはいば）と定めまつりて、とこしへにみ国守ります遠つみ祖達をはじめ、み国のために命を捧げ給ひて、われらが祖国日本を守りましし、もろもろの同胞（はらから）のみ霊を招（ま）ぎまつりまして、海の幸山の幸くさぐさを供へまつりて、み霊祭り仕へまつらむとす。

かへりみれば、先のみ戦にみ国敗れてより、六十六年を過ぎたるも、我が国の政治、教育、マスコミ各界の者の多くは、未だに東京裁判史観に呪縛され、日本の弱体化を意図した占領下の憲法を保持し、公を忘れて私を優先する思想にとらはれ、国家の尊厳と日本人としての誇りを失ひきたりき。

をりしも、東日本を襲つた巨大地震と大津波は、一瞬にして家屋、田畑を飲み込み、街を壊滅させ、多くの犠牲者を出す大惨事とはなれり。父や母をなくせし子、子をなくせし親。家や故郷を失ひし人々。その悲しみはいかばかりであらう。

されど、この大惨事の中、本来日本人が抱きし、よき国民性と、万世一系の天皇を御中として、国民が心を合せる国柄の素晴らしさが、現れ出でしといふことは、天の啓示と言ひつべし。若き国民（こゝろな）の中よりも、国のいのちを蘇へらせむとする、数々の新しき動き興りはじむるは、頼もしきかぎりなり。

ここに集ひしわれら、さらに汝（いまし）み祖（おや）たちの伝へ来しみ言葉と、いさをしき歴史に学び、心開きて語りかはし、力たられどもみ国のいのちを守らむと務め、祖国復興のために心を合せる、われらが上を見そなはし、導き給へと、参加者一同に代はり、岩越 豊雄 謹み敬ひ 恐（かしこ）み恐みも白す。

夜の集ひ

あいにくの雨天のため食堂に参加者全員が集まり、差し入れの飲料を手に、学生班有志の趣向を凝した寸劇、有志による「元寇」の合唱に盛んに声援や拍手が送られた。終りに全員で「われは海の子」「故郷ふるさと」と「進めこの道」を歌ひ、盛会のうちにお開きとなった。

第四日目

(八月二十二日・月曜日)

合宿を顧みて

合宿は最終日を迎へ、日常生活に戻る前に研修の意味を問ふことになった。今林賢郁副理事長は第一日目からの日程を振り返り「講義の中でさまざまな事柄が語られた。しかし、ただいい話をお聞きして良かったで済まずに、各自の胸の中に留めて日々の生活で咀嚼して欲しい。要は一人一人の自覚に懸かっている。その積み重ねが国を支える力となる」と語り、次いで飯島隆史合宿運営委員長は「参加者のご協力のお蔭で無事日程を消化できたことに感謝したい。ここでの研修は大学で、或いは職場で生じてこそ意味がある。今後とも力を尽しませう」と呼び掛けた。

全体感想発表表

挙手をして登壇した参加者は率直に胸の裡を語った。

「初日は不安で一杯だったが楽しく勉強できた。参加して本当に良かった」「心を磨く生き方を貫いたソクラテスのやうに生きたい」「天皇陛下の国民を思はれる御心に触れて、天皇陛下は全国民の心の拠り所だと思った」「短歌の相互批評の時、厳しく指摘してくれた班員に感謝したい」「日常生活での行動、実践こそが学問の核心だと思った」「ふだんの生活に戻ってからの勉強が大事と思った」「日本を思ふ人達があんなにも大勢あることを知って嬉しかった、力を得た」「戻ったら海軍出身の祖父に深く話を聞いてみたい」「日本人の精神性や歴史について素直に友と話せた」「班の友と話し合へたことが心の糧になった」「講義も身に沁みたが、それ以上に班員と徹底的に語り合へたことが貴重だった」「四日間の合宿を短く感じた。もっと日本のことを知りたい」「今の日本があるのは先人の死に物狂ひの戦いのお陰だと思ふことができた」…。

閉会式

心ひとつに取組んだ合宿の日々を物語るかのやうに、国歌斉唱は閉会式の折に比して何倍も力強いものとなった。主催者を代表して磯貝保博副理事長は「班別研修や講義聴講など合宿日程の中で、皆さんはふだんの何倍も心を遣ったことと思ふ。スポーツの後とはまた違った疲労感を覚えるのは心を労したからだ。もっと日本のことを勉強したいとの力強い、率直な感想発表をありがとうがたくお聞きした。合宿で得た経験は皆さんが生まれ変わるための契機である。御家族・友人に感動を是非伝えてほしい」と挨拶した。福岡大学経済学部三年松井豊君が「合宿で多くの友人、言葉に出会ふことができた。合宿で得たものを持ち帰り、考へを深め日本人として成長したい。各地の勉強会に加はり来年の合宿に向って互ひに努力しよう」と思ひを述べた後、神奈川大学法学部二年市川絢也君の閉会宣言を以て第五十六回全国学生青年合宿教室は幕を閉じた。

助言者の紹介

(社)国民文化研究会 理事長

元・日商岩井

(株)伊勢利代表取締役

元・(株)講談社

(社)国民文化研究会 事務局長

月刊「国民同胞」編集長

(株)寺子屋モデル代表取締役

元・小田原市立矢作小学校長

元・東急建設(株)

元・新潟工科大学 教授

中村学園大学教授

山口県立熊毛南高等学校教諭

(株)IHIEアロスベース

興銀リース(株)

日章工業(株) 代表取締役社長

新明電材(株) 常務取締役

IMSグループ本部 総合企画部

昭和音楽大学名誉教授

福岡県立直方高等学校講師

中島法律事務所

熊本市役所

元・キューピー(株)

上村 和男

澤部 壽孫

今林 賢郁

磯貝 保博

稲津利比古

山内 健生

山口 秀範

岩越 豊雄

奥富 修一

大岡 弘

占部 賢志

寶邊矢太郎

内海 勝彦

小柳志乃夫

藤新 成信

飯島 隆史

最知 浩一

國武 忠彦

小野 吉宣

中島 繁樹

折田 豊生

山本 伸治

元・品質・環境システム審査員

元・富山県立富山工業高等学校教諭

SIS(株)

元・浦和市役所

神奈川県立生田東高等学校教諭

(株)キャリアセンター中国

(株)ケイエヌラボアナリシス

(財)交通事故総合分析センター 理事長

元・福岡県立筑紫丘高等学校 総括教頭

元・札幌西陵高等学校教諭

鳥栖市役所

日本ユニシス(株)

羽後信用金庫石脇支店

日本郵便大村支店

(株)寺子屋モデル

若築建設(株) 九州支店

上天草総合病院

北九州市立医療センター 技師

自衛隊東海防衛支局岐阜防衛事務所

(株)アルバック

神奈川県立氷取沢高等学校教諭

熊本県立熊本高等学校教諭

福岡中央公共職業安定所

小諸市役所商工観光課

山本 博資

岸本 弘

内田 巖彦

井原 稔

原川 猛雄

久々宮 章

天本 和馬

小田村初男

小林 至

本田 格

西山 八郎

大町 憲朗

須田 清文

橋本 公明

廣木 寧

池松 伸典

福田 誠

森田 仁士

神谷 正一

北浜 道

大日方 学

久保田 真

古川 広治

中澤 栄二

日本青年協議会

アサヒ飲料(株)

東洋紡績(株)

(株)寺子屋モデル

(株)ラック

中外鋳業(株)

講師

松岡 篤志

澤部 和道

庭本秀一郎

横畑 雄基

高橋俊太郎

濱崎 史嘉

合宿運営本部

飯島 隆史・最知 浩一・山本 伸治

廣木 寧・森田 仁士・高橋 俊太郎

指揮班

横畑 雄基・池松 伸典・中澤 栄二

澤部 和道・濱崎 史嘉

事務局

稲津 利比古・漆原 弘子

埼玉県立進修館高等学校

国立長野高専

日本大学第二高等学校

中尾スタジオ

写真記録班

北九州市立医療センター

吉川隆太郎

中澤 悠大

平楨 駿一

松永 和文

森田 仁士

走り書きの“感想文集”

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままに掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班—男子学生—

様々な感じ方

(東京大学 理 三年 高木 悠)

短歌の相互批評が心に残つてゐます。班の全員が同じカッター研修の事を歌に詠んでゐたにもかかはらず、皆の詠んだ場面も感じ方も本当に様々でした。相互批評の中で話を聞いていくうちに、そのやうな事を感じてゐたのか、さういふ気持ちだったのかと、自分では思ひもしなかつた所に心を寄せてゐることを新たに発見させられたり、感動の焦点を共有したりする事が出来ました。この作業は苦しい事もありましたが、楽しい作業でした。今までも東京の短歌の会に参加し、相互批評を行つてきましたが、改めて短歌創作は面白いと思ひましたし、今後も続けていきたいと思ひました。

詠はむとしたるころを皆で汲み歌を整へゆくは楽しも

来年も参加したい

(青山学院大学 社会情報 三年 鈴木 光)

初めて合宿に参加させて頂き、非常に意識の高い方々の中に私のような若輩がいることで迷惑になったかと思ひます。しかし、皆さんのご協力の御蔭で無事こなすことができました

た。

つたない言葉で大変申し訳ありませんが、改めまして一班の学生の友人、指導員の山口秀範先生、そして国文研の方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。又、縁あらば来年も再び参加させて頂きたく存じます。

国憂はらからふ同胞達を見れば思ふ我が日の本も安泰なりと

自分自身を磨いていきたい

(福岡大学 経 三年 松井 豊)

合宿に参加して、一人の人として自分以外の人のためにどのような事をすれば良いのか考えることが出来ました。吉田松陰が国のことを命をかけて考えたり、歴代の天皇陛下が国民のことを第一に考えておられたりしたことを知り、このような方々を目標にしたいと思います。大学生活に戻つても人のために自分自身を磨いていこうと思います。

また、班別研修の中で自分の気持ちを分りやすく相手に伝えることの難しさを感じたので、表現の方法やまとめ方を勉強していこうと思います。相手に分りやすく気持ちを伝える事が出来るようになれば相手の気持ちを理解することにもつながるはずなので努力します。

自分の物の考え方を見つめ直せた

(明治大学 法 三年 岡部訓亮)

班別研修で同世代の人や先輩と自分の考えを素直に話し合うことが出来た。これは日常生活ではなかなか得られない経験であり、自己と他者との比較の中で自分の物の考え方を見つめ直すことが出来た気がした。

村落の隣人同士のつながりが時は経たれど我に脈打つ

自分の無知を思い知らされた

(山口大学 理 三年 廣田真樹)

理学部に属していますが、古文や日本の歴史について輪読する機会は全くなく、そのことについて討論することもなかった。今回の合宿はお互いに聞き、話すという良い機会でした。あまり話すことは出来ず、また他の人の知識の豊富さと発想力には驚かされました。同時に自分の無知を思い知らされました。今回を機に日本の歴史や文化について知りたいという気持ちになりました。

歴史ある日本の歩みを今に知り我が行く先を見直さむと思ふ

カメラ・レポート1



開会式。九州工業大学大学院1年・小林達郎君(右)の力強い開会宣言の後、九州工業大学情報工学部4年・大森淳史君(左)は「この合宿では心に残る言葉を見つめたい。互ひに心に残った言葉を語り合ひたい」と合宿への決意を述べた。

相手の話をよく聞くことが大事だ

(中央大学 文 二年 廣木摩理勢)

二回目の合宿ということもあってか、班別研修が大変充実していました。自分の気持ちをまとめて、それを語るというのはとても楽しいものだと思えることができました。もう一つ大切なことを学びました。それは相手の話を聞くということです。去年は自分が発言するだけで精一杯で話を聞く余裕なんてなかった。今年はその余裕が生れしつかりと相手の話を聞くことが出来ました。相手の話を聞くことによつてどのような話をどのように話せばよいかが見えました。

先人のあまたのみ霊は見えねどもわれは捧げし感謝の誠を

自分自身で考えることを意識した

(福岡大学 経 一年 藤井勇太)

この合宿教室を通して、様々な講義を受ける上で大切にしたのは「自分の考えを持つ」ということです。当たり前のことなのかかもしれませんが、先生方の講義を聴いているとそれほど思ってしまうことが少なくなく、気がついたら自分自身で考えることを忘れてしまっていました。このことを意識した上で、班別研修に参加すると、自分の意見をスムーズに出すことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

また、この合宿中、今の日本のことを強く考えることが何度もあり、昔からの日本人の思想を今自分達が思い出し、受け継いでいかなければと思いました。

この合宿は、今の自分について多くのことを考えさせられました。これからの生活に少しでも役立つよう努力して行き、この合宿を無駄にならないようにしたいです。

机上にて想ひめぐらせ学びたる新たな友と過せしあの時

第二班—男子学生—

心霊に響く感動をすること

(福岡大学 経 四年 岡松侑希)

心に残っていることは、廣木寧さんの講義の中で紹介された安岡正篤の言葉です。それは「何か心霊に響く感動の氣を得て、それからそれへと縁に随つて自らが学問求道しなければ、真に自己を開発することは難しい」という言葉です。自己を開発するにあたって、心霊に響く感動をすることがきっかけだと思います。先人の言葉に触れ、生き方を知り、心が通い合うような学びができるようになればと思います。

今回の合宿では学生体験発表をさせていただきました。自分の思っている事を言葉で正確に表すことはとても難しいと感じました。はじめは緊張しましたが、自分なりにおちつい

て話すことができたと思います。

仲間と出会えてとても楽しくすごせました。ありがとうございました。
ございました。

江田島で友と学びし四日間終り近づき心さみしき

自分に対する契り

(慶応大学 院 法学研究科 一年 杠 泰介)

この合宿は自分に対する契りであったと思います。

講演で先生がおっしゃられましたのが、この場で感じた強い決意を基に自らの思う志をとげなくてはならないと思います。

大勢の共通の志を持つ方々との一時の共鳴は気持ちのよいことですが、実生活で常に自らの志を持つことは容易ではありません。しかし、自分の行動実践こそ学問の核心だと私は信じます。私は十年前から新聞に自分の考えを投書などしておりましたが、そのようなことでなくても、例えば町のゴミを一つ拾うことは、祖国の地を清くすることだと思えます。つまり自分の生活のすべてが学問の成果だと思えます。決して自分に嘘をつかないようにしていきたいです。このことこそ、家族・祖国日本、そして何より自分の魂の世話であると思います。この合宿での契りを必ず果たしたいと思います。

自らの志をばとらへたりなとて手放さむこの宝をば



カメラ・レポート2

主催者を代表して上村和男理事長は「豊かになった今日、見失ったものは何か」と日本人の意欲や国家観に対する問題提起をし、「これらについて考へ、気付き、目覚め、そして各自が奮起するやうな合宿にして欲しい」と挨拶した。

「故郷」の唱歌が印象に残った

（拓殖大学一年 千葉 敦）

今回の合宿教室に参加できてとても良かったです。思うこととはいくつもありますが、特に印象に残ったのは唱歌で、一番心に残ったのは「故郷」です。その三番の「志をはたして、いつの日にか帰らん、山は青き故郷、水は清き故郷」という歌詞が日本をととてもよく表していると感じたからです。

私は自転車で日本を一周したことがあります。そこで感じたのが木々がいたる所に生えていて、林や森をつくっているということだと思います。日本人には当たり前のことですが、とてもすごいことだと思います。これは日本が水が豊富な国だということです。「故郷」の歌詞にあるように、水は日本を語る上で一番大事だと思います。日本の多くの古典の中に、豊かな草花が登場しますが、日本人の美意識はこの豊富な水からきていると思います。先祖が守ってきたこの自然を守っていくことがとても大切だと思っています。

短歌相互批評で

ともどもにカッター研修を思ひ出し皆で声出し笑ひ合ひたり

慰霊祭での貴重な経験

（中村学園大学 流通科学 四年 岩本真明）

今回初めて合宿に参加させていただきました。高校一年か

ら通い続けている居合道場の先代館長が江田島の海軍兵学校に在学中に終戦を迎えました。その館長の当時の想いに少しでも触れたく、カッター訓練や慰霊祭の際に想いをはせました。

慰霊祭の時、神主が「オー」と大きな声を低い音で唱えた際、我々の並んでいる列の周囲に海軍の白い制服を着た英霊たちが、不動の姿勢でこちら側を見ている様な妙な感覚を得ました。国を守り、愛する家族を守るために戦火に散つていかれた方々が現在の我々に対してどのように考え、伝えたいことは何なのかと問われた厳かな儀式でありました。貴重な経験をさせていただきました。

沖へゆく一艇を漕ぐその櫂は江田島を背に荒波越えたり

祖先のおかげで自分の存在がある

（福岡大学 経 三年 坂口雅人）

私が一番印象に残ったのは慰霊祭の行事でした。このような儀式に参加するのは初めてで、とても厳かに行われた気の引き締まったお祭でした。はるか昔からの祖先のおかげで、自分が存在しているということを感じることができました。祖先に感謝する心、それが生涯を通して、日本人として大事なことが分りました。

慰霊祭に先祖の魂の思はれて我も続かむと意志固めけり

短歌相互批評で班の一体感を覚えた

(埼玉大学 教養 三年 山中利郎)

私は四度目の参加である。毎年、参加直前には不安を覚えるが、来ると楽しい。今回は班別研修、短歌相互批評に特に力を注ぐことができたと思ふ。班員みな率直に感じたところを述べてみて、自分も班員の気持ちをより正確に知りたい、思ひの共有を深めたいと思った。班の友が作った短歌を味はひ、より正確な言葉を見つけようと友が頭を悩ましてゐるのを見て、なんとかそのときの友の心に近づけるやう言葉を考へた。互ひの素直な気持ちを共感し合へたとき、班の一体感を覚えた。四回のうちで最も充実した短歌相互批評だった。また、自分と同じ年代の友と話し合ふ機会があつて似たやうな悩みを抱いてゐると感じ、自分も全力で自分に、周りの人に向き合ひたいと思ふことができた。今回は初参加の方と会へたことにも喜びを感じ、この尊い出逢ひを大事にしたいと思つた。参加回数が増えるにつれ、悔しいほどに楽しさが増していくのを感じた。時間があつといふ間に過ぎていった。友が詠みし歌のころを知りたしと言葉つくせることの楽しさ

講義、研修を生かしていこう

(山口東京理科大学 工 二年 清藤邦彦)

三泊四日は正直長く感じてしまった。全ての講義が難しく、

カメラ・レポート3



合宿導入講義。「ソクラテスと吉田松陰」と題し、(株)寺子屋モデル講師頭・廣木寧先生は「先人の遺した文章を味読し、その生き方に学ぶ生き方を学んで欲しい」と、ソクラテスと吉田松陰の文章などを多く引用され、二人の思想の共通点から学ぶ「学問と人生観」について語られた。

班員と対等に会話することができなかつたことに悔しさを覚えた。同時に学ぶこともできた。日本という国は先代が築き、継続している文化そのものから成り立っているのかなと感じた。その文化をさらに継続することが魂の世話をすることにすることも学べた。学問は上から下への知の伝承ではなく、自ら問うて、自分なりの答えを出すことだと解釈している。合宿での講義、研修を生かしていこうと思う。

日本の本の国の繁栄を支へるは文化の魂を受け継ぐことか

心に響いた吉田松陰先生の文章

(日本青年協議会 松岡篤志 41歳)

「吾れ此の回素より生を謀らず、又死を必せず。唯だ誠の通塞を以て天命の自然に委したるなり」

今回は「魂の世話をするといふこと」がテーマであったが、吉田松陰の留魂録に刻まれた右記の言葉が大変心に響いた。

又、「今日死を決するの安心は四時の循環に於て得る所あり。・・・十歳にして死する者は十歳中自ら四時あり。二十は自ら二十の四時あり・・・」との文章(魂を留めむとして一字一字を記された文章)を改めて拝読し、刑を受ける松陰先生の心境が如何に澄み切ったものであったかが偲ばれた。

特攻隊で散華された二十歳前後の若き青年たちの中に、澄み切った思ひを遺書に記されてゐる方々を思ふとき、「二十は自ら二十の四時あり」との境地に達せられてゐたのではない

かと思はれてきた。

自分の魂に向き合ふ時を持ちたい

(興銀リース株 小柳志乃夫 55歳)

廣木寧兄の導入講義の「魂の世話をする」の言葉が心に残る。自らの魂に向き合ひ、先人の魂を偲ぶ、さういふ時を持ちたいものである。國武忠彦さんのご講義の古代人の「知る」「知る」の語義の解説——「知る」とは対象を自分のものとして一体化する、相手の靈魂と一体になるといふ意である、とお話はこの点にもつながる大事なご指摘だつたと思ふ。

「自分の頭で考へ、自分の言葉を語る場」として、この合宿をとらへてゐた学生(奈良崎恵祐君)の全体感想発表は自分の心にも響いた。歌の勉強もその一つだが、自分の言葉を求めていきたく思ふ。それは自分の素直な心を取り戻す作業でもあらう。

全体感想発表にて

学生の心素直に語ります言の葉聞けば胸あつくなる

この友らかたみに語りつき合ひて学びの場を築きてゆかなむ

人との「繋がり」を大切にしたい

（専修大学 法 二年 奈良崎恵祐）

御講義に於いて「連続性」、「繋がり」という言葉が出てきましたが、この合宿において、私は人との繋がりを強く感じることが出来ました。去年の阿蘇合宿で知り合った方々と再会し、研修で再び語り合えたこと、一度しか話をしてないにもかかわらず、「奈良崎君、よく来てくれたね」「また会えて嬉しいよ」とお声をかけて下さったこと、この何気ないことに私は感激せずにはいられないのです。「繋がり」を持つということ、これは人生において大切にしなければいけないことだとこの合宿を終えて強く思いました。

合宿最終日の朝

皆起きろ不意に聞えて目を覚ます嗚呼名残惜し友との別れよ

忘れられない合宿となった

（拓殖大学 経 二年 平田聖英）

今回の合宿は忘れられないものとなった。理由は二つある。一つは自分自身のステレオタイプを先生のお話や仲間と話し合ううちに壊して今まで見ていなかった一面にきちんと目を



短歌導入講義。山口県立熊毛南高等学校教諭・寶邊矢太郎先生は「感動したことを素直に正確に三十一文字に詠むことが大切である」と述べられ、実際に感動された短歌を挙げつつ「作者の感動が素直に詠まれてあるから、作者の心持が波打つやうに私に伝はってきた」と述べられた。

向け、それについて考え自分の意見を述べる事が出来たこと。もう一つは自分がいかに無知であるかを知ることが出来たことである。ソクラテスではないが、人と色々と話す上で、いつもその気持ちを持っていられるように、これから国文研のゼミ等に出るなどして日々精進してゆきたい。またそのような勉強をしつかり続けてゆけるような仲間を大切にしていきたい。

四日間の合宿を終へて

薄れゆく記憶の中に只一つ今も残るは師の言葉かな

見聞を広められた

(福岡大学 経 三年 大山憲哉)

この合宿教室に参加して多くのことを学びました。一つ目は多くの人の話を聞いて見聞を広められたことです。毎回の講義・班別研修での考えや意見を通して内容を深めることができました。また、班には福岡だけではなく関東地区の人もいたので、大学の魅力を知るとともに、奥深い人間性も知ることができました。二つ目は物事に対して集中する気持ちを維持続けることです。輪読や討論においてついでゆけなくなり何のことも分らなくなることがありました。合宿参加者のほとんどが驚くほど講義に集中しているのを見て、自分自身もがんばらなければならぬと思います。

今回の合宿を通して学んだことをこれからの大学生生活に活

かせるようにしたいと思います。

わかれの日つらくなれどもいつの日か会へるよきつとあの所にて

心に残った天皇のお言葉

(福岡大学 法 四年 黒木教太郎)

合宿への参加動機は伯父からの紹介でした。日本のことに対する知識の乏しい私が班の仲間とうまく打ち解けあうことが出来るかと心細く感じました。しかし寝食を共にし、また同じ学びの場で共感し、各々の意見を出し合ううちに、互いの距離が近づいてゆくことをひしひしと感じ、最終日ともなると部屋は非常に居心地の良い場所へと変りました。

合宿を通じて最も心に残った言葉は班別研修のときに出された「耐へ難きを耐へ」という天皇のお言葉です。私はこのお言葉に非常な重さと天皇の偉大さを感じました。今回の合宿に福岡から二日かけて自転車に乗ってきて参加してよかったです。

学びしは日本の民の受け継ぎし祖先を思ふ大和魂

日本の素晴らしい国柄を学んだ

(九州工業大学 情報工 四年 大森淳史)

山内健生先生の御講義「日本歴史の特性」の中で「人柄」と「国柄」を結ばれたお話にとっても感動しました。人と国が

繋がり、その繋がりには日本の長い歴史が連綿と続いて来たからこそ素晴らしい国柄となり、切ろうとしたら、壊そうとしても、切れない、壊せない物になっているのではないかと感じました。日本の国柄、他人を思いやる心を育むために、輪読会を続けて行きたいと思います。

連綿と続く歴史が繋がりにて太子の心仲間と語りぬ

日々精進してゆきたい

(國學院大學 文 四年 相澤 守)

今回初めて班長を務めさせて頂いて責任者としての大変さを学ぶことができました。班長として班別研修で議論を深め進めるといふ務めは、自分の至らなさから十分に果たせたいへません。来年以降の合宿で再び班長を務める際には今度はしっかりとその任を果たせるやう日々精進してゆかうと思ひました。諸先生方、運営に携はれた方々には心から敬意を表すると共に私たちに素晴らしい学びの場を提供して下さいたことに感謝申し上げます。これに応へるべく戦後六十六年のまがを払拭し日本を本来の日本たらしめる一助となるやう努めて参りたいと思ひます

壇上ゆ閉会しますと発せられ合宿は無事終はりたりけり



真剣な面持ちで講義に聞き入る合宿参加者たち。

新しいスタートの瞬間

(福岡県立直方高校講師 小野吉宣 65歳)

今のこの充実感、この感涙にむせぶ喜びにひたれる。これが自分のみそぎであり一年の締めくくりであり、新たな魂を輝かせ得た―新しいスタートの瞬間である。

相澤守君「来年も参加します。又会ひませう」と言つてくられてゐた。意気に応へるべく日常の活動に怠りなく、力を注ぎたい。

日本の神話に発する歴史の一貫性を守る勉強することは、イデオロギーではなく戦前からの「文化の戦士」としての戦ひである。「進めこの道」ひたすらにと口ずさみ、「神州不滅」我らは信ずをたからかに歌ひつつ、この道をすすんで行きたい。

慰霊祭の折に

ざあざあど雨は降りたり外に出でみ祭りするは叶はざりしや

和顔もて導き給ひし師の君は慰霊の庭で待ちたまふらむ

心こめ大岡君はなきみたま迎へるすべを解き給ひたり

ふと外に目をやりみれば嬉しかり雨やみてをる願ひ通ずる

心が絶たれずに続いてきた日本

(株IHIEアロス 内海勝彦 56歳)

山内健生先生の御講義「日本歴史の特性」では改めて日本

の国柄の尊さと皇室の有難さを学ばせて戴いた。中で紹介された柳田國男の「死シ去リタル我々ノ祖先モ国民ナリ」との言葉は、この国が、亡くなつた者、今生きている者、これから生れてくる者の共同体であることを考えさせてくれた。又、坂本太郎先生の「日本の第一の国体は、皇統が変わらない、つまり万世一系であるということが中心です。」との文章に触れ、この日本で先人たちの心が絶たれずに続いてきたことの意味、守らうとしてきたものが何であるかを、今一度、現代に生きる我々がしっかりと学び、後世に伝へてゆく義務があると強く感じた。

合宿直前痛風発症せり

右足をひきずりをれば会ふ人ごと声掛けくれぬ吾を氣遣ひて

先輩は持ち合はせたる葉をば我に給ひぬ有難きかな

今ごろは全体感想発表か思ひ馳せたり早退の途次

第四班―男子学生―

過去の日本人を否定し生きることが恥ずかしいと感じた

(九州工業大学 院 情報工 二年 伊藤健司)

講義を聞いて素晴らしい、面白いと思うことはあつても受動的であるので班別研修で講義の復習をするのはいい活動だと思ひました。

國武忠彦先生の古典講義では、素晴らしい仁徳天皇の人間臭い一面が古事記から感じられ、身近な存在に思えました。

また山内健生先生の講義では皆と班別研修で日本人の今の「国家観」の欠如について話がおよび、過去の戦争で亡くなった英霊の話を指導員の庭本秀一郎さんから聞いたときに、日本人の子孫である私たちが、過去の日本人を否定し生きていることの恥ずかしさや英霊の方々の無念さを感じ、涙が出そうになりました。

時間かけ短歌に心を正確に詠みこむことの大切さ知る

天皇について勉強したい

（鳥取大学 四年 井上翔太）

この合宿に参加して日本を知ったつもりになっていたことを思いしらされました。特に天皇については今でもまだ知らないことが多く、今後自分で少し勉強してみようと思いました。「日本歴史の特性」の御講義で、日本人は「連綿性」、「躍進性」、「中和性」を歴史的に持つており、これらを繰返しながら日本という国が形作られたというお話を聞き、エンジニアの卵として、これまで日本製品が世界と戦い勝ち残ってきた理由は、日本文化が深く関係していたのだと思いました。

合宿で多くの友の真心と先人の思ひ胸に刻みぬ



朝の集ひにて。他団体と共に国旗掲揚とラジオ体操を終へた後、『われは海の子』（2日日朝）・『江田島健児の歌』（3日日朝）・『蛍の光』（最終日朝）を合唱した。

「気持ちを書ける」行為に意味がある

(東京大学 院 工 二年 内海雄太郎)

人の話に耳を傾けること、相手の心情を理解しようとする、それらの難しさを、改めて痛感した。日頃の人や物事への接し方がうわべだけのものではなかったかと自問せざるを得なかった。ソクラテスや吉田松陰の、命を超越した生き様。聖徳太子や歴代の天皇の民を思いやる姿、友が短歌に顕した言葉。それらを顕在化させた心を理解するには、時間も、知識も、気力も足りなかった。しかし、この合宿を通じて、理解・共感に至らなくても、「気持ちを寄せる」行為にこそ意味があることを実感できたのは大きな収穫であった。その方法としての短歌も学んだ。良い人たちとの出会いもあった。

大学生最後の夏を江田島で過せし事を嬉しく思ふ

昔の偉人達が命を懸けて日本を愛し、守っていたことに衝撃を覚えた

(福岡大学 経 四年 蓮尾健一)

今回初めてこの合宿に参加しましたが、江田島という場所に非常に心安らくなりました。まるで童心に戻ったような感覚で、その中で勉強できることを幸せに思えました。

講師の方々のご講義やその後の班別研修などを通して、本当にみんな日本のことが大好きで、日本のことをもっと知り

たいんだなと思いました。僕もその中の一人です。日本のことが大好きで、古文とか歴史とかよくわからないけれど、僕のほうが日本を好んでいるぞ、と意気込んでこの合宿に参加しましたが、自分の考えが甘かったと認識しました。

昔の偉人達は、命を懸けて日本を愛し、日本を守っていた。このことに衝撃を覚え、こんな人がいたんだ、もっとこういう人達を知りたいと思いました。参加して良かったと思います。

班別研修は成長の場となった

(福岡大学 商 三年 三反畑 輝)

最初の班別研修では自分の意見を積極的に述べる事が出来ませんでした。しかし、先生方や班友たちの話を聞くことによって、自分の考えも深まってゆくのが感じられました。二日目、三日目となるにつれ少しずつ自分の考えも友らに伝えられる様になると、班別研修は更なる成長の場となりました。それまで自分の内のものだけであった考えが皆に理解される事によって、高みへ昇ってゆく事がとても楽しく思えました。

班別研修にてこの国の貴きを知りて

日の本に生まれし意味を知りしときおのづと起きつ御國への愛

短歌相互批評で自分の歌が何倍も素晴らしいものに
生れ変ってうれしかった

(神奈川県 法 二年 市川絢也)

江田島での合宿を知ったのは、正大寮での輪読会に参加している国文研の会員の方からのお誘いがきっかけでした。

正大寮では会員のみなさまから多くのすばらしい話を聞いていたので、さらに多くの話が聞けるということを教えてもらい、参加しました。

合宿では廣木寧先生の力強いお話を聴き感動しました。その感動を短歌にしましたが、思った以上に自分の思いを三十一文字で伝えるのは難しく、出来あがった歌が班での短歌相互批評で何倍もすばらしいものに生まれ変わったときは、とてもうれしかったです。

たくさんの先生方、友達の想いを日々思いながらこれから
の大学生活に励んでいきたいです。

閉会式にて

壇上の国旗を眺むる我が想ひ三日前とは変はりてをりき

真摯な班友の姿に励まされた

(東洋紡績(株) 庭本秀一郎 36歳)

今回、班の指導員として学生の皆さんと共に学ばせていただく機会を頂戴し、「指導」など及びもつかぬ程、自らの勉強が不足してゐることを痛感いたしました。振り返れば、た

カメラ・レポート7



東京大学名誉教授・小堀桂一郎先生は『歴史に学ぶ「公」と「私」の関係』と題して講義をされた。その中で、聖徳太子の十七条憲法は「おほやけ(公)」と「おほみたから(民)」のあるべき姿を高い次元で示されたものであり、「人間の内部にある私利私欲の罪深さに対する洞察が太子の思想の中核をなしてゐた」と語られた。

だ班友と共に、一生懸命学んだ四日間でした。

むしろ、素直に疑問をぶつけてくれたり、自ら進んで古事記を読みたいと言ってくれたり、自分の心がうまく短歌に表現されて、爽やかな笑顔を見せてくれたりする彼等の姿に、私自身が大いに励まされました。そして自らの根っことしての日本の文化を学び、その素晴らしさに気づく営みを続けていきたいといふ気持ちが高まってきました。

国思ふ気持ち如何に表せば良きかと問へり真摯なる友は

もつと先を読みましといふ友どちの声に奮ひて古事記読みゆく
民思ふ大御心に感じしを歌に詠み得て笑まふ友はも

第五班—男子学生—

「志」はどこかで「公」につながる

(九州大学 芸術工 一年 森田健太郎)

合宿を通し私の中で「公」に身を捧げることへの認識が変わった。以前は盲目的に捧げると考へてをり、「私」を自覚する事が大切であると分った。「私」は利己的で他者を傷つけるものだと合宿で強く感じた。そのやうな「私」といふ弱い面を見つめ脱却しようとした時にはじめて「公」に身をつくすことができると思ふ。また「公」に身を捧げる真の学問を行ふきっかけとして「志」の大切さを実感した。「志」とは自

らが生涯をかける道である。社会で他者と関り生きる人間にとって、「志」はどこかで「公」とつながっている。私は弱き人間である。「志」が「私」に近くなってしまうひさうになる。そこで「公」を思ひ出し、正しい「志」を持ちたい。

江田島で友と見つけし志胸に抱きて日々を過さむ

講義や研修に多くの刺激を受けた

(福岡大学 理 三年 原田真太郎)

今回の合宿教室は、普段学ぶことができないことを学ぶことができましたし、いろいろな方たちと仲良くなれてとても良かったです。合宿に参加する前は、とても不安でしたが、いざ合宿に参加すると、ソクラテスと吉田松陰の講義や仁徳天皇の講義、そしてカッター研修など、たくさんイベントがあり、とても刺激を受けました。中でも一番印象に残ったのはカッター研修です。正直なところ厳しいと聞いていたのだから始める前はあまり乗り気ではありませんでした。そしてカッター研修が始まったとき、とても厳しそうな元自衛隊の教官がやってきたので、とても恐かったです。整列などをするときは、やはり厳しかったです。しかし、いざボートに乗ると意外にも非常に楽しかったです。その後カッター研修を題材に短歌を作りました。そして、翌日短歌相互批評で自分の作成した短歌はさらによい出来になったのでとても嬉しかったです。今回の合宿はとてもいい思い出になりました。

合宿で多くの思ひ出見つけたりこの経験は忘ることなし

自分も志を立て完全燃焼したい

(山口大学 医 三年 福田裕紀)

初めは色々な刺激がもらえたら十分だ位にしか思っていなかったが、講義を聞き、話し合い、意見を述べ合う中で、いつの間にか大学の講義よりも真剣に学び取ろうと努力する自分の姿がそこにあった。講義をされる先生方、一緒に話し合う友、皆志を持ち、輝いて見えた。自分も志を立て、生きていく時間を完全燃焼させたいと思った。

夜更けまで寝る間も惜しみ国思ひ語らふ友は宝なりけり

言葉は心に迫る力を持つ

(千葉大学 教育 四年 国弘大資)

初参加で特に心に残ったのは、班別研修でした。講義の内容を深めるため、正確な言葉で率直に語り合った経験は非常に有難かった。人の心に入っていくというか、言葉は心に迫る力を持っているがゆえに語り合うことは難しくもあり、有意義でもある時間でした。

江田島に集ひ学びし人々は歳の別なく皆同志なり



短歌創作を兼ねた野外研修。《カッター研修》では自衛隊OBの厳しいご指導の下、「ソーレ」「ソーレ」と声を一つにオールを漕いだ。

カメラ・レポート 8

心の内面を語り合うことができた

(九州工業大学 院 情報工一年 小林達郎)

非常に有意義な合宿教室だったと感じています。初めての参加でしたが、開会宣言、また班長を任せられ、非常に強い衝撃を受けました。更に学生の班員全員が初参加という、右も左も分からぬまま始めることになりましたが、今思えば却って好都合だったように思います。形にとらわれず議論を進めることができたからです。また、お互いをフォローし合える信頼関係を短時間で築けたことも大きかったと思います。日を重ねるにつれ、班別研修の深まりや自分自身を含む班員の成長を感じました。三日目の慰霊祭後の班別研修では英霊について涙ながらに本気で語らう場面もありましたが、それを境に班員内での個人の内面について語り合うようになり、互いの信頼が更に強くなったと感じました。まさに人間としてまた日本人として成長した瞬間でした。今は感無量です。合宿に参加して良かったです。

み友らと心開きて語り合ひ日本人たる誇りを抱けり
魂を洗ふがごとき素晴らしき合宿の日々何ぞ忘れむ

学生時代の初心に立ち戻ることができた

(神奈川県立永取沢高等学校 大日方 学 46歳)

四年ぶりに合宿教室に参加したが、今回は学生班の班付き

をさせていただき、班員の皆さんと充実した四日間を過ごすことができた。先生方の御講義も心落ち着けて拝聴することができ、学生の頃の初心に立ち戻った思ひがした。廣木寧先生の御講義の「魂の世話をする」といふことは自分の「志」を定めることであり、この志は先輩・同輩・後輩との交友の中で磨かれていくのだと思つた。また、國武忠彦先生の『古事記』の御講義は仁徳天皇や石の日光の命の御姿が彷彿と浮かび来るやうで大変感銘深く、『古事記』の豊かで広やかな世界に触れさせていただいた。

班での研修も皆それぞれに自分の考へや思ひを率直に語ってくれ、とても有意義なものであった。慰霊祭後の班別研修の折、小林君が涙ながらに「今の日本の現状は英霊に対し本当に申し訳ない」と語つた姿に深く心を動かされた。これからも互ひに便りを交はし、励まし合つていきたい。

慰霊祭の折に

激しくも降り来る雨はお祭りの始まるときし晴れ上りたり

御霊らの護り給ひて蔽かに御霊祭の進みゆくなり

御病に倒れ給ひし先輩の御姿自づと浮かび来るかも

(山根 清先輩のことをお偲びし)

同信の友として付き合ひを継続したい

(日本ユニシス(株)北海道支店 大町憲明 56歳)

今回、学生班にしていたとき、大変感謝してをります。学

生さんと合宿全日を一緒に過ごすことにより、皆さんの心の動き、感動を共有できたことが大きな財産となりました。今後私の居住する札幌はもとより、今回同班であった学生さんと遠隔地ながらも同信の友としてお付き合いを是非続けて参りたいと存じます。地域（札幌）においては、年内を目標に一泊二日の合宿を今回の五名の札幌からの参加者にて開催したいと考えてみます。また、その合宿記録を全国の友に発信し、互ひの励みとしてゆきたいと思ひます。

一昨年（厚木）、昨年（阿蘇）までは遠方より参加するだけで精一杯のところがありました。今年各御講義を拝聴し、志を達成するべくしつかり勉強し、自信を持って日本人としてのあり方を人に伝えてゆける様に努力したいと思ひます。特に慰霊祭の時、先人に対し誠に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。学生時代に御指導いただいた諸先生の御魂に対しても一つでもお応へできるやうに私生活に戻つても、その志を見つめ直してゆくやうにしたい。

慰霊祭にて

師の君のみ教へ継ぎて人々に伝へむつとめ心に定めぬ
日の本のみ魂に守られ現世の我は生きなむ心つくして
同信の友得てここに祖先らのみ魂をまつる祭継がなむ



《教育参考館見学》では、近代日本を支へた海の防人達の墨跡や遺書を拝観した。先人の苦闘を心静かに偲ぶ時間であった。

第十一班 女子学生

印象深い慰霊祭に感動

(富山大学 人間発達 四年 藪あすか)

合宿の中で行われた慰霊祭も印象深い思い出のひとつです。厳肅な雰囲気の中、祭司の無駄のない整然とした動作に感動して、御霊にご降臨いただいて祈りを聞いていただくことの重さを実感しました。お祈りを聞いていただいた自分たちが、まずそれに相応しい行動をとっていかねばならないと感じました。

友達と共に学びて笑み交はし気づけば最後となりにけるかな
班友と我らを支へし先生に恵まれしことのありがたきかな

自分自身が成長出来て良かった

(共立女子大学 文芸 三年 宮坂礼子)

父に勧められこの合宿に参加しましたが最初は遠い広島島の「島」にゆくことにとても緊張しました。合宿では、貴重な講義を聞き、班別研修で自分の気持ちを素直に伝えるということを繰り返すことで、知らなかったり、分らなかったことが、すつきりとしてゆくような気持ちになりました。この合宿に参加し、一步踏み出すことでこんなにも自分自身を成長

させることが出来て本当に良かったと思います。
目と耳と心を使ひ学びたり多くの言葉胸にきざみて

班友の前で話す勇氣と責任

(中村学園大学 人間発達 三年 横尾菜摘)

講義の内容はとても難しく感じました。大学でも習ったことがなく、今まで興味を持ったことのない内容でしたが、先人の話や言葉にしだいに引き込まれていきました。そしてだんだんと講義に心を動かされながら聞き入る自分が出てきました。講義後の班別研修では、学んだばかりの新鮮な話題をもとに、それぞれ感想を語り合い、深め合って行きました。学校では話題にならないようなことを、人の前で話すのほとても勇氣がいり、発言に対する責任も伴ってきましたが、そうすることで自分の頭を整理し、人の意見を素直に受け入れ、共感し合うことができました。

私は将来、教師になることを目指しています。私は日本をつくっていく子どもたちを育てていかなければならないと再認識させられました。教育者として責任ある行動をし、正しい事実を子どもたちに伝えていきたいと思いました。本当にありがとうございました。

歴史にふれ人々にふれ学びしは国と先人を尊ぶこころ
語りつつ仲を深めし友たちをつゆ忘れめと胸にちかひて

一步を踏み出す勇気をいただいた

(福岡大学 人文 三年 田中麻理)

この三泊四日の合宿を通して、私は日本の先人の方々の素晴らしさに感動し、また、自分自身の未熟さを痛感しました。全ての御講義を通して感じたのは、先人の方々は日本人としての誇りを持ち、一貫して貫き通す強い心をもっておられるということです。今の私は、自分自身に対して自信を持つことができず、周りの環境に流されて、自分を見失ってしまっているように感じることがありました。しかし、御講義を聞いて、一步を踏み出す勇気を頂いたような気がします。

日本人としての誇りを持てるようになるために、日本の歴史をきちんと学んでいきたいと感じました。そして、他者に気遣いが出来るなどの優しさを日本人の良い面としてとらえ、受け継ぎながら、自分自身を貫く強さを身につけていきたいと思いました。班の仲間や指導員の岸本弘先生、運営して下さった皆様にとっても感謝しています。ありがとうございました。

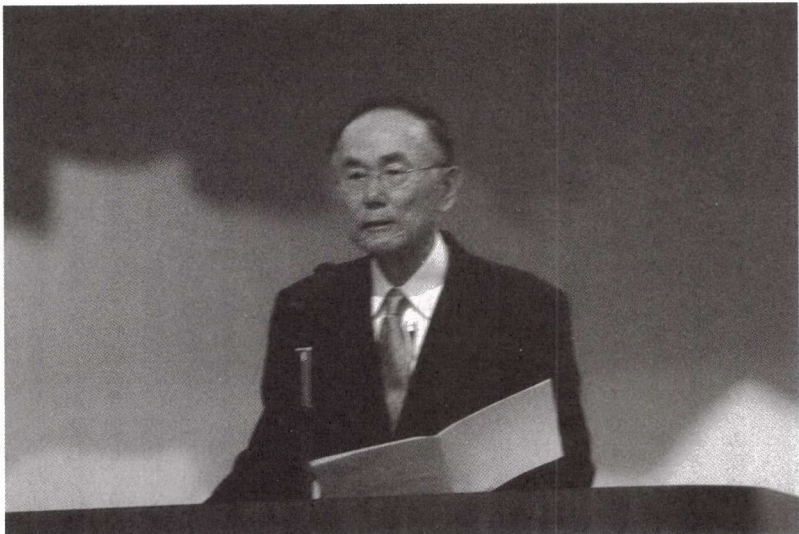
先人の生きし姿に学びつつ一步を踏み出す勇気をもらふ

吉田松陰について詳しく調べたい

(聖心女子大学 教養 一年 岸花帆里)

「学ぶ」ことについての概念が変わった合宿だった。特に廣

カメラ・レポート10



古典講義。『古事記 - 仁徳天皇の巻 -』と題して昭和音楽大学名誉教授・國武忠彦先生は冒頭で「仁徳天皇は大きな前方後円墳の御陵で有名だが、どのやうな天皇なのか誰も知らない」と仰り、『古事記』の記述や本居宣長『古事記伝』の注釈を辿りつつ、仁徳天皇のお人柄について親しみを込めて語られた。

木靈先生の「ソクラテスと吉田松陰」は興味深かった。自分の志のためなら生きるか死ぬかは問題ではないというソクラテスの考え方にとても驚いた。今まで余り詳しいことは知らなかった吉田松陰も同じように自分の生死よりも志を果たすことを第一に考えていたと知り、松陰についてより詳しく調べたくなった。松陰は一心に日本のために思い学んだ。日本という国が減じるか否かが己の肩にかかっているという意識があったのではないだろうか。勉強とはテストで点を取ることで目標のものではない。それは自分でも分っていたつもりだが、松陰のような時代を生き抜く力は私には欠けていたと思う。

一心に学びゆくことの楽しさを思へば自づと類には笑みが

今まで日本人としての自覚が足りなかった

(アメリカンスクール高校一年スクイラチオティ茉莉菜)

私は、アメリカンスクールに通っているのでもっとも日本史を学ぶことはありません。日本語の授業はあるものの、短歌や古典について学ぶこともありません。この合宿に参加して私が最も嬉しかったのは、今まで聞いた事のないお話を聞き、感じたこともないこの国、日本への誇り、ありがたさ、そして忠誠心を感じられた事です。普段、外国人にかまわって生活をしている私は、日本が大好きなもの、日本人としての自覚が足りなかったと思います。

二つ目に嬉しい事は、全くつながりのなかった班員と、三泊四日という短い間に大切な仲間になった事です。班別研修、カッター訓練、班別短歌相互批評等といった活動を通して、みるみるうちに絆が深まっていくのが感じられました。

また来年も、再来年もこの合宿に参加し、立派な社会人、日本国民になるよう一生懸命勉強し、成長していきたいと思えます。このたびは本当にありがとうございました。

合宿で共に学びし友達とこの先もなほつながりゆかむ
先人が築きしてくれしこの国を魂込めて守りゆきたし

短歌の班別相互批評を終へて

(元富山工業高校教諭 岸本 弘 66歳)

昨日の短歌の班別批評が終わったところで合宿を振り返った。それなりの緊張感を持って班研修に取り組んで来たが、これによかったのだらうかと。例年のことではあるが、この短歌の相互批評を通じて、班員同志の気持ちは一層打ち溶けるものを感じる。

この友ら帰りゆく家それぞれに父母子らを待ちていませむ
いかならむ縁ありてかこの年もすなほなる若きと会ひまつるかな
をりをりに便り交して新たなる友とのむつみ深めてゆかむ

第十二班―女子学生―

自分の弱さに打ち勝とうと思う

（佐賀大学 文化教育 四年 吉本朋代）

廣木寧先生のご講義で、死を免れるよりも下劣を免れる方が難しいという内容のお言葉をききました。生きていくと様々な場面で、自分に甘くなつて、「公」より「私」を優先しそうになったり、自分の弱さに負けてしまうことが多々あります。しかし、そういう時にはこの言葉と、この言葉のようにな下劣を免れ最期まで堂々と生きさつた吉田松陰やソクラテス、公の為に力を尽された聖徳太子のことを思い出して自分の弱さに打ち勝とうと思います。魂の世話をする事、すなわち学問をするという事は偉大な先人達の魂との間に絆を感じる事だと思いました。自分が連綿と続く歴史の一部であること、日本の誇るべき文化・歴史を受け継いでゆくことを改めて強く感じました。

御製にふれて

人民をおおみたからと読みたまふその御心ににじむやさしさ



班別研修。講義で感じたことを率直に語り合ふ。

カメラ・レポート11

短歌創作を通じて自分の課題が見つかった

(福岡大学 経 三年 竹原なつ美)

合宿で一番印象的だったのは「短歌創作研修」です。私は自分の感情を人に伝えたり表現することが得意ではありません。このため、自分の作った短歌に自分の思いや感情を上手く表現できませんでした。相手に心を開くまでに時間がかかり和歌に込めた思いを上手く説明できませんでした。短歌創作研修を通じてこれからの自分の課題が見つかったと思います。また多くの偉人の生き方を学び感銘を受けました。これからの歴史に触れあっていたいと思います。ありがとうございました。

先人の深き思ひを胸にきざみその心持ち明日を生きましたし

魂の世話をして心を育てていきたい

(成蹊大学 四年 西形昭紀)

不安な中で始まった合宿でしたが、班員との討論や講義を通じて不安が和らいでいきました。この合宿で一番心に残っていることは初日の廣木寧先生のお話の中にあつた「魂の世話をする」という言葉です。人にとつて一番大切な心を育てるため物事を良く考え、様々な角度から捉えるよう訓練をしていきたいと思います。また、講義を通じ日本の長い歴史とそこに現れる日本人の特性(誠実さ、謙虚さ、突破力など)

を知り、この国の奥深さや魅力を感じ取ることができました。最後の合宿を振り返っての中にもありましたが、今後自分が日本人として生まれ、日本で育つたことに誇りを持てるように常に日本に対する探求心を忘れずに歩んでいけたらと思います。

いにしへの偉人の心学ぶうち心の深くやはらぐを感ず

古事記を読んでみたい

(中村学園大学 人間発達 三年 久富玲奈)

國武忠彦先生の御講義を拝聴して、本当に昔の短歌は良いなと思いました。昔の言葉は難しく一見読みにくかったり、理解しにくかったりしますが、國武先生の解説はとても分りやすく引き込まれます。先生の御講義をきっかけに古事記を読んでみようと思います。また慰霊祭のおごそかな雰囲気に触れ、本当に心から清い気持ちになって、日本人で良かったと思いました。

遅くまで国の行くすへ友皆と心一つに語りつくせり
合宿で学べしことを忘れじと心に強く刻みつけたり

もっと学問をしななければならない

初めての参加でした、この四日間は本当に充実したもので
(文京学院大学 外国語 神谷静香)

した。合宿参加者が日本について懸命に考え、いくつになっても向上心を持って学問に取り組み、先人の思いを継承していかうという姿勢に本当に感動しました。班別討論では語彙が少なく自分の考えを上手に表現できなかったのですが班員の皆が汲み取ってくれたおかげで真剣に語り合うことができました。もつと学問をしなければいけない、学問をしたい、合宿を通じてそのように思いました。ここで学んだこと、ここで出会ったことを大切にしていきたいと思います

江田島で親しき友と夜更けまで心ゆくまで語り合ひたり

班員と素直に話が出来た

(立命館アジア太平洋大 二年 名和裕美)

特に述べたいのは、班員をはじめ人との出会いで得た喜びについてです。全くの初対面だった班員たちと、寝食をともにして、夜は語らい、お互いの話を聞くことで理解を深めてゆく過程は、とても楽しいものでした。この場で知り合えたからこそ、大学の友達とは話さないような、自分の日本に対する考えや、価値観を、素直に打ち明けられたように思います。お互いに良い出会いであったと確信しています。

語らひし友と別れて去りがたき共に過ごせし江田島を発つ



合宿3日目。「日本歴史の特性」と題し、拓殖大学日本文化研究所客員教授・山内健生先生は日本国憲法について触れて「“悪しき国家”から“平和国家”に生れ変わったとする国の連続性を否定する観念が行き渡った」と指摘され、「《古代的なものが生き続ける歴史国家》といふ大事な側面が無視されてゐる」と語られた。

同志とよべる友ができた

(仙台第二高校 二年 木戸希望)

先生の一言一句が深い意味を持つていたご講義、厳肅な雰囲気であった慰霊祭など四日間は大変に充実していました。もつとも忘れ難いことは班員の先輩たちと夜遅くまで語り合ったことです。最初はうまく言えませんでした。二日目からは緊張も解けたくさんの話ができました。道徳や教育、政治、報道、外交等の様々な問題について熱く語り合っていました。「ああ私はこのために江田島へやって来たのだ」と思いました。今までの生活ではこのような話題では議論にならなかったのですから。班の皆さんは年上の先輩方で、今まで私がいもよらなかつた視点や主張を聴くことができました。志を同じくする方々でした。合宿の最後に勇気を出して壇上で震えながら感想を述べました。この4日間で成長したと思えます。

この地での日々はわたしの背を押せり今やらすしていつやるのかと

江田島で得たなによりも尊きは同じ志をもつ先輩方なかつたら

若いひとらにお伝へしたかったこと

(株)ケイエヌラボアナリシス 天本和馬 (61歳)

指導者として班員の中に入りお世話をしましたが、年齢も

若い女子学生ではたして上手く出来るのかとの思ひがありました。限られた時間の中で以下のことだけは伝へたいと思ひ取り組みました。①先人の思ひに触れること、特に参加女子学生と同じ年代の方が思ひを残して学徒出陣され戦没されたこと。②古事記の輪読では日本の古い古い歴史に日本語を通して触れること。そして今に変わらぬ先人の思ひに心を通はすこと。

うまく伝へ得たのかとの不安もありますが、参加の学生さんは実に素直で率直に班員の言葉を汲み取り、自分の言葉を紡ぎだしていました。当初の心配も杞憂だったやうです。班員の感想ではこのやうな語りひの場を持ち得たことの喜びを語ってくれました。今後も連絡を取り合ふつもりです。

慰霊祭の後に

若くしてうせにし学徒を偲はむとお歌静かにあぢはひて読む
これだけはわかりてくれたしと手短にうせにし人の物語して
惜しむにもなほ余りあり貴女らと歳も変わらぬ二十三にして

第二十一班 社会人

学ぶ姿勢

(日本郵便大村支店 郵便課 橋本公明 56歳)

今年の合宿も学ぶ事がたくさんありました。

学ぶ姿勢の基本は、事実を積み上げ、最終的には自分が決めるといふ事です。この言葉を大切にして努めてまいりたいと思ひます。社会人二十一班の人は、とてもすばらしい人でした。学問の基礎である、事実をしつかり押へる事。事実の大切さを、班別討論の中で、学ばせて頂きました。本当にありがとうございました。

朝の集ひにて

眼閉ち心鎮めてゆくうちに小鳥の声の響きわたりぬ

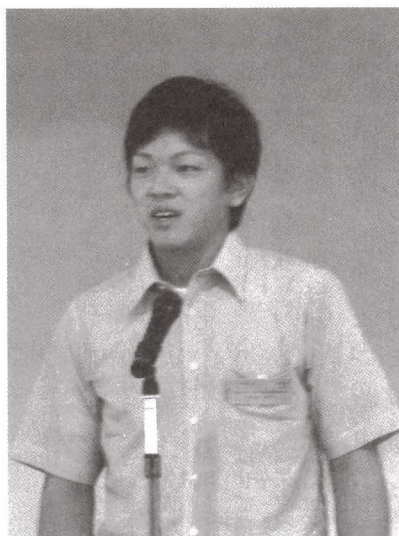
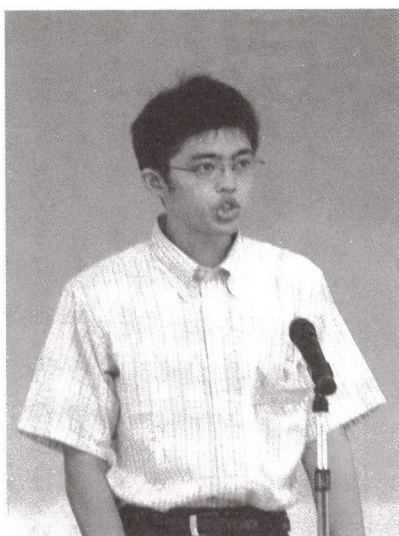
正しい歴史と文化を継承していくこと

(今村琢弘 73歳)

七十三歳にしての初参加でしたが、「まだまだ自分も成長している」と実感できた研修会でした。それは、講師の先生の素晴らしい内容と、これを学ぶ生徒との真剣な関係を肌で感じている研修会であった事など、感動がたくさんあったからだと思います。わが国の政治、経済は、今後ますます困難なことになると思いますが、「正しい歴史と文化を学び継承していくこと」こそ最重要であると学びましたので、これを基礎にして家族、友人など、身近なところから改革の活動をすすめたいと思ひます。

子供等と共に学べるうれしさをわが成長の礎とせむ

カメラ・レポート 13



学生発表。福岡大学経済学部4年・岡松侑希君（右）は学内サークルで輪読を続けてきた経験に触れ「これからはさらに言葉から感じたものが日々の生活に生かされるやうに努めたい」と語った。東京大学理学部3年・高木悠君（左）は当会の学生寮《正大寮》に「寝食を共にする者同士が本音で語り合ふ生活に惹かれて入寮した」と述べ、同信生活を行ふ上で学んだことについて語った。

日本人らしい日本人になりたい

(福島義榮 63歳)

元寇を学んだ昨年の阿蘇合宿教室に引き続き本年も、江田島合宿に参加する事が出来ました。尖閣事件と東日本大震災、次々発生する内憂外患に居ても立っても居られずの心境です。その中、本合宿教室は、私に日本の歴史、伝統を改めて深く学ばせて頂きました。就中づく、ご皇室、天皇さまの尊さ、ありがたさに感謝の心を深めると同時に、日本人であること、日本人に生まれた幸せを、つくづく感じるものです。

今後は、和の心を持ちつつ、日本と日本の心を守るため、うそや虚偽、不正に断固闘う熱い心を持ってまいります。そして日本人らしい日本人になりたい。尚大好きな國武忠彦先生の御講義を拝聴したこと、澤部壽孫様のお導きに心より感謝申し上げます。

はらへ 遙々と車を駆りし我をして今防人と言はれ嬉しき

日本人が忘れていたもの

(姉)福岡県中小企業経営者協会 後藤公一 47歳)

初めて合宿に参加し、非常にいい経験ができました。現在の日本人が忘れがち、あるいは忘れていたことを気づかせてくれる内容のものだったと思います。

個人的には日本の戦後六十六年については、批判されるべ

きところも多々あるとは思いますが、賞賛されるべきところも多くあるのではないかと思います。これが日本を一時的には経済的に世界のトップに押し上げたのではないかと思います。しかし現在は、日本の地盤沈下がよく言われておりますが、それは戦後の日本を、発展させてきたものが、限界と云うか。行き詰まりとなってきたのではないかと思います。今回の合宿は、現在の多くの日本人が忘れていたものを思い出すことの重要性を教えてくれた合宿でした。

江田島の合宿にて

いちぢくの大きくなりたる青き実¹に秋の近きを感じけるかな

素晴らしい友と感動を得た

(姉)致知出版社 永廣理人 25歳)

今回の合宿では、深い学びと世代を越えた素晴らしい仲間、そして感動を頂きました。誠に有難うございました。

今まで国文研を支えて下さった事に、深く感謝申し上げます。本の魂を継承して下さった事に、深く感謝申し上げます。

先生方のご講義からは、多くの事を学ばせて頂きましたが、それ以上に、日本の現状に対する危機感、未来への責任感を深く抱いていらつしやると感じました。私は今年で二十五歳ですが、これからは、日本人としての誇り、責任を私達が担っていかねばならないと感じました。そして、英霊の方々に、恥じない日本の姿を報告するのが、日本人としての役目

だと感じます。学んだ事を、自分の持ち場で、各々が発揮していき、活力のある日本を取り戻し、作っていきたいと思います。

英霊の御魂の前に頭垂れ合す顔なし国は乱れき

先輩の心を継いでいざゆかむ我一人より国を護らむ

日本の事をもっと知りたい

(株まるぶん 嵐 隆将 27歳)

今回この合宿教室で学んだ事は数えきれない位多々ありますが、一番は、日本の事をもっと知りたいという気持が自分に表れた事です。

班の仲間とも素晴らしい交流が出来たと思います。大変貴重な経験をさせて頂きました。どうもありがとうございました。つどひにてみたと歌ひしふるさとは一生忘れぬ思ひ出となる

真の日本人を取り戻そう

(株はせがわ 伊藤真人 40歳)

今回初めての合宿教室になりますが、合宿前は、新聞やテレビで、中国問題、憲法改正、民主党政権について危機感や問題意識がある程度持っていました。合宿に参加し、各講師のお話や班員の方々との語り合いにて自分自身も何かをしなければ

カメラ・レポート14



創作短歌全体批評。国民文化研究会参与・折田豊生先生が参加者全員の創作短歌がプリントされた冊子を手にとり、ユーモアを交へつつ添削をされると、講堂には笑ひ声や驚きの声が起こった。そして「短歌が身近なものになれば、日本歴史の広やかな世界に分け入ることができる」と結ばれた。

第二十二班——社会人——

本日の日本が何かに気づいた

(佃福岡中小企業経営者協会 古賀正博 42歳)

今回の合宿を通して私が確認できた最大のもものは、日本を二千年という時間軸でとらえるということであった。私自身及び私の周りは近代史にとらわれすぎで、本日の日本の良さ、強さ、美しさに到達していなかったようにおもえてならない。このことに気づかせていただいたことは私のじんせいにとつて大変大きな出来事であった。

人生に迷ひし時こそ古典いにしへびとかな 人も我が師と気づきて

日本人の真心を孫子達に伝えていきたい

(富山市立西部中学校非常勤講師 北本 宏 64歳)

小堀桂一郎先生、廣木寧先生、山内健生先生等諸先生方の名講義を拝聴することができ、ますます確信を深めることができました。また、班別研修も、時の過ぎるのも忘れてすべてのプログラムを有意義に過ごすことができました。

私の耳に今も残っておりますのは「合宿を顧みて」の中で今林賢郁副理事長がおっしゃられた「戦後六十六年の衰退した曲折の年月は確かにありましたが大したことないじゃない

という思いになりました。また、学生や若い方々が、日本の将来を真剣に語る姿を見て、頼もしく、まだまだわが祖国も捨てたものではない。若い世代の人々のため、自分自身にできることを、全力で行いたいという気が溢れてきました。

この合宿に参加しているような方が、一人でも増え、真の日本（日本人）を取り戻すため、国民文化研究会の皆様頑張っていただきたいと思えます。

無知の我皆のおかげで開眼し誇りの持てる美しき祖国

古事記を再読したい

(中島法律事務所 中島繁樹 63歳)

廣木寧先生の「ソクラテスと吉田松陰」は大変痛快な講義でした。講義なるものは、このやうに具体的かつ興味深くすべきものです。國武忠彦先生の「古事記——仁徳天皇の巻——」も大変おもしろく聞きました。改めて古事記を再読したいと思ひました。

歌稿のすべてが活字印刷されたこともうれしいことでした。夜遅くまでパソコン入力の作業をされた方に御礼申し上げます。

静けさの夜の齋庭に声しるく明治の御製の朗誦ひびく

ですか。日本には二千年の歴史があるんです。必ずこの伝統の中に戻っていきますよ。日本は！」と言われたことです。まことにそのとおりと思います。我々の心には日本人の真心が確固として存在しています。それを孫子達に伝えてまいりたく存じます。

朝日いで小鳥の声も聞こゆなかな椰子の実の歌広場にひびきぬ
いにしへの大和心のかげやきはたうたうとして絶ゆることなし

魂の世話をし続けること

(有次郎楽器 長崎圭作 51歳)

人はなぜ生きてゆくのか？その人間永遠のテーマの答えを求めするために生きているのか？と考えていたなかで「魂の世話をする」というソクラテスの言葉が胸にストンと落ちた気がする。

魂の世話、精神の錬磨には限界はないが人が生涯をかけて求めるべきテーマだとの確信ができた。

無数無限の縁が織りなすこの不可思議な人生の中で魂の世話をし続けることのできる存在でありたいと思った。

夏の朝童謡唱歌たからかにうたへば小鳥もさへづりはじめぬ



班別の短歌相互批評。班員一人一人の気持ちに向き合ひつつ、皆で短歌を添削していく。

歴史に学ぶ事の大切さ

(放送大学大学院 文化科学研究 修士 前田哲男 49歳)

小堀桂一郎先生の警咳に接する事かなひまして洵に有難く拝聴致しました。

歴史に学ぶ事の大切さがよくわかりました

慰霊祭、深く感銘致しました。

小田村寅二郎先生往時の事を振りかへる事度々御ざいました。
た。

まなびやの名残り惜しみつつ山なかのタクシーにのり帰り路につく

合宿で得たことを活かしたい

(静岡県立中央特別支援学校 杉山浩二 38歳)

班の人との関わり、興味深い講義、江田島の美しい自然、三泊四日があつという間のようでした。

特に、カッター研修が良かったです。メンバー一人ひとり力が合わせて漕ぐことで舟が進んでいく。そのことが何とも言えない喜びでした。教官の方も厳しい時には厳しく、優しい時には優しく、貴重な時間を過ごせました。

合宿という集団生活の中で活動することで、自分自身を深く見つめることができました。

合宿が終わり、家庭や職場に戻っても、合宿で得たことを

活かせるようにしたいです。学び成長する気持ちに年齢はあまり関係ないことを知りました。これからも成長していきたいです。

集団の研修生活過ごしつつ己の姿の省みらるる

「短歌創作」がよかった

(株まるぶん 多羽田益央 35歳)

今回、初めて参加しました。自分の住む国「日本」のことをなんにも知らない状態で参加して大丈夫なのかという気持ちでした。

三日間の講義すべてに興味を持ち真剣になるのは難しかったのですが「短歌創作」はとても楽しそうに思われました。カッター研修を題材にして歌を作り、班の皆さんと一緒に考え、修正していい歌になったと思います。

二十二班で行動できたこと、嬉しく感じています。合宿での勉強の事を忘れずにがんばりたいと思います。

最終日の朝に班友の姿みれば別れゆくことさみしくなりぬ

精神力をトレーニングしていきたい

(農業 赤坂耕輔 28歳)

班の皆さんの歳があまりにもバラバラだったので無事に終了する事ができるのか不安で一杯でしたがだんだん緊張がほ

ぐれて楽しく過ごせるようになりました。

僕は短歌の事はよくわからないのですが様々な先生方の話を聞きまして精神を強くする方法を学べました。どのような場面で役に立つのかはわかりませんがこれからの人生の中のどこかで役に立つのだと思います。精神力をトレーニングしていきたいと思います。

この合宿では具体的に役に立つものを得る事ができず残念でしたが、貴重な経験をしたと思います。ありがとうございます。

ゴミはなくスミのスミまできれいな見習ひゆきたし部屋のありさま

班別研修のすばらしさ

(羽後信用金庫石脇支店 須田清文 56歳)

真剣に合宿に取り組んである二十二班のみんなとの学びの場を持ち得たことがうれしかった。

講義の内容に、またその資料として取り上げられた文章に立ち向かひ、自分自身にも語りかけながら班別の研修を班友と進めていくことのすばらしさ、有り難さを再認識させて頂いた。

是非また参加したいしみんなにも参加してもらいたい。

縁ありて集ひし人らと寝食をともにしつつも学び合ふかな

日々ともに語らひ学べばおのづから湧きくる力のありがたきかな



慰霊祭に先立ち、元新潟工科大学教授・大岡弘先生から慰霊祭斎行の趣旨と祭儀の手順が説明された。その中で慰霊祭とは「豊かな日本の文化に浴する幸せを、先祖のみ霊に感謝申し上げ、自らも祖先の方々のみ跡に続いて行かうとの気持ちをも新たに、決意を固める祭りである」と語られた。

第二十三班—社会人—

一致団結とか協力を感した

(日章工業株 樋口哲郎 43歳)

初参加して一番に感じたことは同じ目的意識を持つていれば、年齢、職業に関係なく、誰かの話に耳を傾け、仲間にもうことが出来る。それが、一致団結とか協力というものなのだと改めて感じる事が出来ました。各自が個々では違うんだと感じることが出来、有意義な体験をさせて頂きました。初顔がいつの間にも顔なじみ貴重な経験皆ありがたう

「日本人としてのあるべき姿・生き方」を確かめるために参加した

(古田達朗 64歳)

齢六十四歳にもなって恥しいことであるが「日本人としてのあるべき姿・生き方」について、漠然としたものしか持たせていなかった。それを確かめるために参加したが、講義を通じて「学ぶことの本質」と「今後の歩む道筋」が少し分かったような気がします。しかし、未熟であり、これからも機会を見つけて学びたいものである。

最後に、合宿の講師の先生方、国文研の諸先輩、運営委員、指揮班の各位におかれましては、大変お世話になり厚く御礼

申し上げます。誠にありがとうございます。

合宿で学びし歌を続けむとおのれに誓ふ明日への道に

信念を持つて行動をしたい

(株)はせがわ 岩田敏幸 37歳

一番感じたことは、今までは何事も他人まかせにしてきたという事です。自分自身の心を見つめ直し、自分の信念は何かを見つめ直し、その信念を持つて行動をすることが大切であると学びました。自分自身を見つめ直すには、日本人である事に誇りを持ち、今回の研修で学ばせて頂いた日本古来から伝わる伝統や考え方に従った行動をするように心掛けたい。

最終日の朝の集ひにて

瞳閉ぢ心静かに聞きたれば大自然の声胸にしみいる

合宿で学んだこと・感じたことを忘れずに精進して参りたい

(社)福岡中小企業経営者協会 青山晃典 33歳

今回の合宿には自分の気持ちを正確に文字に表せられるように短歌を詠むこと、日本の歴史についてより深く学び、先人の教えを少しでも吸収してこれからの自分の行動に活かしていけるようにすることを課題にして臨みました。短歌については、まだ自分の気持ちを文字に表すことができず、最初に提出した歌を大幅に変更する結果となってしまいました。

しかし、相互批評をして頂くことにより澤部壽孫指導員や班の皆様のお蔭でより良い歌が出来、知恵をお借りすることの素晴らしさとその力の大きさを感じることができました。また、先人の生き方、考え方を学ぶことにより、自分がこれから人の為に何が出来るとか改めて考えることが出来、これからも学び続けることにより人の為に何が出来るとかを見つけて出すことが出来るのだと思っております。今回の合宿でご教示頂いた事、感じたことを忘れずに精進して参りたいと思います。本当にありがとうございます。

江田島の学び舎集ふ若人のひたむきな姿に我も学ばん

こころざし持ちて学びに勤しめば心にかかる国の行く末

心新たに

(ハローワーク福岡中央 古川広治 44歳)

何回も合宿に参加させていただきながら自分の知識のなさ、力不足を痛感してをります。講義の内容も充分に理解できず、語るべき言葉を語ることができなかったこと反省してをります。しかしながら、日本人としての自覚を持ち独立した一人の日本人として自信を持って生きて行こうと心新たな気持ちでをります。

主宰する輪読会から参加者を出せなかったこと申し訳なく、しかし来年に向けて引き続きそして心新たに学びの場を持ちたく存じてをります。



慰霊祭は、屋外に設けられた斎庭で厳修された。心地良い夜風の中、亡き師亡き友を偲び、合宿参加者全員で『海ゆかば』を奉唱した。

班員の皆様の言葉から学んだもの数多くありました。ありがとうございました。

運営に携はれた皆様、ありがとうございました。

日の本の男おとことしての自覚持ち生きなむと思ふ心新たに

我が魂を磨き続けん

(株致知出版社 藤尾允泰 22歳)

三度目の参加となった今回の合宿も大変意義深い経験となりました。江田島の地で学べる事に深く感動を覚えます。英霊たちの努力のお蔭で今我々は平穩に暮らすことができている。そのことに感謝しながら学ばせていただきました。

最も心が奮い立ったのは、廣木寧先生のご講義で紹介されたソクラテスの言葉です。「世にもすぐれた人よ、君はアテーナイという、知力においても、武力においても、最も評判の高い、偉大な国都の人でありながら、ただ金銭を、できるだけ多く自分のものにしたいたいというようなことにだけ気をつかっていて、恥ずかしくはないのか。」正に今の我が国を象徴していると思います。この言葉を自分の心に絶えず突きつけて日本男子として勇ましい先人達に恥じない生き方をして行きたいと強く誓いました。

勇ましき英霊たちに恥ぢぬやう我が魂を磨き続けん

一人一人のひたむきさが合宿教室を支へてゐる

(澤部壽孫 70歳)

飯島隆史委員長を始めとする運営委員、指揮班の皆様の一年のご苦勞に深謝申し上げます。百四十一名と参加者は少なかったが充実した内容の合宿で健康を害する人もなく見事に終了した。一人一人のひたむきさが合宿を支へ大きな成果をあげる合宿教室の不思議さを今年も感じた。慰霊祭の直前に雨が止み、御霊の恩を感じた。

慰霊祭(八月二十一日夜)

不思議にもみまつりの直前まへに雨やみぬみたまのふゆを思はするごと

と
みたまあまたち天降りまししか風さやぎ紙垂しでの今しもゆるるを見れば
至らざる我らなれどもひとすぢの道を行きなむ見守り給へ

合宿最終日

雲間より朝日射し来て緑濃き山ふところに鳥の声する

若さらの壇上に立ちまごころのこもる言葉をいやつぎ語る

今私に出来る最も大切な行い

(鶴花園 鶴 比呂子 26歳)

私は昨年の阿蘇での合宿に参加させて頂き、「ぜひ来年も参加したい」と強く思っておりましたので、江田島へやって参りました。昨年は全てが初めての経験であり、その全てを通して「私はこれまで日本の国や先人の方々の事を知らずに生きてきたのだな」と恥ずかしく思い、同時に早くそれまでの時間を取り戻せるように、歴史を学び、自分が生まれてこれた日本のことを知りたいと思いました。その様な意識のもとに、今回の合宿でも歴史を学ぶことで自分の中に何かを得て帰ろうという決意を致しました。昨年同様諸先生方による御講義は様々な切り口から、日本人として自国に誇りを持つことに導いて下さる素晴らしいものでした。カッター研修に於いても「私」だけと考えるのではなく共に艇を漕いだ人達と呼吸を合わせ協力することで何倍もの力となり、かけがえの無い時間を過ごせたと思っております。一人の力ではどうにもならない事も、共に協力をしていくこと。そしてその前提に各々が日本人である自覚や誇りを持ち日々生きていくこと。これが今私に出来る最も大切な行いではないかと感じたとこのろでございます。全ての方々に感謝いたします。今年も有難



夜の集ひ。班別で寸劇や歌などの余興を披露し、楽しいひと時を過した。

うございます。

江田島でまた学ばんと来て会ひし仲間らつどひ語りて楽し

魂の連続性を学んだ

(華泉書道会 坂本和代 61歳)

初めて参加した合宿で魂の連続性を学びました。

初日の廣木寧先生の講義、ソクラテスと吉田松陰―魂の世話をすること―の中で松蔭先生の「留魂録」かきつけ終りて後の五首の歌にいさぎよき大和魂を感じました。特に五首目の「七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや」の歌を忘れられませんでした。そして教育参考館で、ミツドウエー海戦で戦死された蒼龍の艦長柳本柳作さんの「七生報国」の書を見て、ああ、大和魂だ、偉人二人が重なりました。大塩平八郎の言葉「身の死するを恐れず、ただ心の死するを恐るるなり」そのまま深く重く感じてます。

君が代に流るる心皆ともに確かめあひし江田島合宿

娘ともども得難い経験をした

(慶應義塾大学文学研究科修士二年 スクイラチオティ のり子 48歳)

今回娘とともに初めて参加しました。諸先生方の講義に感銘を受け、教育参考館では日本のために尽力をされた先人方を偲ぶ機会を得、また短歌の勉強、創作などの体験をさせて

いただきました。班別研修で、様々な年代の方々と言語合せたことは、大変貴重な経験でした。娘ともども得難い経験をさせていただきありがとうございます。

ますらをの学びたるてふ海清くゆかしき島に吾子と学びぬ

今からでも日本の歴史を学びたい

(内山緑地建設㈱ 内山差得子 37歳)

今回は叔母のすすめで参加しました。何も分からず気楽な気持ちで参加したのですが、日程表を見て、またオリエンテーションでお話を聞いて身が引きしまり一転緊張感に変わりました。

社会人になって全く勉強していなかったし、学生の頃は点数をとるためだけの勉強でしたので、少し難しく感じたところもありましたが、すごく心に響く講義を聞かせていただきました。またその後に行われる班別研修では年代、職業、地域の違う方々からいろんなお話を聞きこちらでも勉強になりました。

今まで日本の歴史について興味がなく知らずに過ごしてきたのですが、今からでも日本の歴史を学び、先人の方々の思い、日本人としての心を学んでいきたいと思えます。

長いようで短い四日間でしたが、大変充実した日々を過ごさせていただきました。どうもありがとうございます。

知らずして過ごせし日々を後悔し今から学ぶ日本の歴史

学問の一步をふみ出したい

(中山佳代子 26歳)

今回の合宿で印象に残ったことばのひとつは小堀桂一郎先生のお話の中にあつた。「公益か私益か、どちらを優先するかをすぐに選びとるのではなく、先人がその問いに対してどう考えてきたか、過去からその対処を学ぶべき」というものである。このことばを聞いて素直に、だから学問をするのか、と思つた。

一日目の廣木寧先生のご講義で、死に直面しても動じることのなかつた吉田松陰の姿と「是れ亦平生学問の得力然るなり」ということばを知つたが、なぜ学問をすると死を前にしても心静かにしていられるのかわからなかつた。それは私自身が、学問とは何であるのかを考えもしなかつたからだと思ふ。ただ漠然と、いろいろな書物を読むこと、くらいにしか思つていながつた。しかし合宿を終えて今の私なりに学問というものをとらえることができた。ただ過去のある一点のできごととしてではなく積極的に先人ののこして下さつた書物を読み、連綿と続く日本のすばらしい歴史の中へ突入していくこと。そうして得たことを生かしていくこと。今回のこの学びの場から、私の学問の一步をふみ出して行きたい。

一回目の朝の集ひにて

日の丸を掲げる大役まかされて子ら直立し説明を受く

カメラ・レポート19



合宿最終日。合宿を顧みて、今林賢郁副理事長(右)は「良い話をお聞きして良かったので済まず、各自の胸中に留めて日々の生活で咀嚼してほしい」と語つた。次いで、飯島隆史合宿運営委員長(左)は「ここでの研修は大学で、或は職場で生かしてこそ意味がある。今後とも力を尽しませう」と呼びかけた。

自国の歴史にもっと真剣に取り組みたい

(島村善子 74歳)

先づは、長いことあこがれてゐた江田島に訪れる機会をお与へ下さいました今回の合宿教室関係者の皆様にご心より厚く御礼申し上げます。

お蔭様で講師の先生方のお力のこもりましたご講演に接することがかなひ、まだまだボンヤリしてゐられないと気付かされました。そして自国の歴史にもっと真剣に取り組まねば、との感を強く致してをります。

当面の課題は三田村武夫著「大東亜戦争とスターリンの謀略」の再読なのですが、若き方々からお力をいただいで、此の猛暑もどうやら切り抜けられさうです。

班員の皆様のみならずご一緒させていただきました方々のご健康とご発展を心よりお祈り致してをります。どうも有難うございました。

合宿教室に参加して

若きらと共に学べばそくそくと湧きくる力身にしむを覚ゆ

懐かしき師にもまみえし合宿は心楽しき集ひなりけり

日本復興の要

(元小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄 67歳)

大震災の後の日本の真の復興の出発点の合宿であった。

小堀桂一郎先生、山内健生兄、その他の方々の講義からも万世一系の天皇を中心に国民が心を合はせて生きる日本の国柄の自覚と学びと普及が日本復興の要とあらためて感じた。蛍の光の歌三番に「筑紫のきわみみちのおく海山とおくへだつとも、その真心はへだてなく、ひとつに尽くせ、国のため」まさにこの精神である

これからの日本を興すは若き等と壇で獅子吠す友力つよし。

第三十二班—女子社会人—

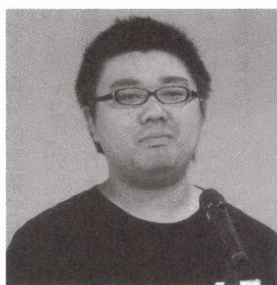
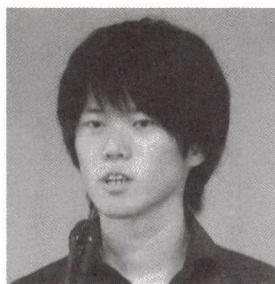
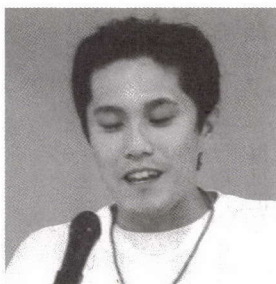
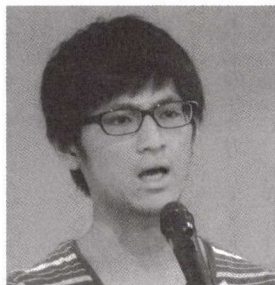
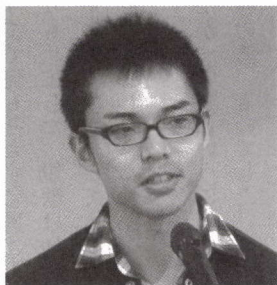
もつと知りたいという気持ちが湧いた

(主婦 露木奈美 40歳)

おばに誘われ軽い気持ちで参加を決めました。その後、合宿の内容や「日本への回帰」を読み、私についていけないのだろうかと、軽く参加を決めたことを後悔しながら、かなり不安な気持ちでここへ来ました。

ところが、わからない私にも先生方の講義は大変面白く、ぐんぐん引き込まれていき、もつと知りたい、もつと下地があればと何度も感じました。こんなに勉強をしたいと思いますのは本当に久しぶりで、自分にまだこのような気持ちが残っていた事も新しい発見でした。

班別研修では、様々な年代の方と接して、戦争・歴史観・



全体感想発表。参加者が自主的に壇上に登ると「不安だったが参加して本当に良かった」「短歌の相互批評の時、厳しく指摘してくれた班員に感謝したい」「日常生活での行動や実践こそが学問の核心だと思った」「戻ったら海軍出身の祖父に深く話を聞いてみたい」「日本人の精神性や歴史について素直に友と話せた」などの感想が語られた。

天皇という存在について、今まで何も考えずに過ごしてきた事を少し申し訳なく思ったりもしました。短歌は初めてで皆さんの協力なしでは難しかったですが、とても楽しく、自分の気持ちが伝わる嬉しさを覚えました。これからも続けてみたいと思っています。

三泊四日の短い期間でしたが、学びということはもちろん人とのつながりもとても内容の濃いものでした。本当にありがとうございました。

誘はれて恐るおそると江田島へ目覚め始めた学びの心

自分の言葉で日本の歴史や文化を語れるようになりたい

(鳥栖市立田代中学校 井上由里子 41歳)

江田島の色々な美しい景色を眺めることができた今回の合宿、どの講義も私にたくさんの喜びと感動を与えてくださいました。と同時に、自分の無知、無学さを痛感し、今後の学びの方向性が見えてきた気がします。

私は福岡のNPO法人師範塾で昨年学び、今も協力委員として勉強させて頂いております。ここ数年、自分が習った歴史がいかに偏ったものであったのかに気づき、本当のことが知りたいと強く思うようになりました。占部賢志先生との出会いにより、日本と日本人の本来の在り方・生き方を知ることが楽しいのです。今回の講義を通して、何度も日本に生まれて良かった、もっともっと勉強して、私自身が全うな日本

人になりたい、そして、自分の言葉で日本の歴史や文化を語れるようになりたいと思いました。

現職の中学校の教師として、日々十三〜十五歳の生徒と接しているのですが、私たちが真実を学び、本当のことを懸命に伝えていけば、子どもたちはそれをしっかりと受けとめ、何かを感じる力をもっています。「主体変容」を胸に明日からまた頑張りたいと思います。

この国に命捧げし英霊に恥ぢぬ生き方求め続けむ

素晴らしい日本を後世に残したい

(東郷神社 川野萬里子 64歳)

急に参加させていただき本当に有難うございました。慰霊祭は静かな中で執り行われて、想い出深い一夜でした。

毎日忙しく一日一日を過ごしている私にとって、あらためて考えさせられた時でした。又、いろんな方とお知り合いになれて世界が広がりました。懐かしいお顔にも逢えました。

遠い昔から先人達が築いてきたこの日本を後世に残してゆくのが私達の使命と感じた合宿でした。

皆様、こんなすばらしい合宿に参加させていただきまして感謝申し上げます。

遠き日に想ひをはせる江田島の故人をしのびてしみる青さに

国を憂うご講義に感謝

(難波江 紀子 76歳)

今日の日本の中枢に立つ人々の恐ろしいほどの劣化の中にあつて、日本の将来はどうなるのかと、憂いは深くなる日々です。そのような思いの中にあつて、今回の合宿はありがたく、ここに集まれた殊にお若い方々に心から拍手を送り、日本の将来をどうかよろしくお頼みしますと切望致します。

一個人の家でも、GHQの占領政策による相続税法などによって旧家はどんどん消えてゆきつつありますが、国家に於いても、国の精神が子々孫々に継承されねば、やがて滅亡に到ります。

今回、諸先生方のお話は、今の日本では本当に尊くありがたく、しかしなかなか拝聴が叶いにくいような現状の中にあります。国を憂う思いを老いも若きにも非常にわかりやすく懇切丁寧に、かつユーモアも交えてご講義下さったこと心から感謝申し上げます。

今後は更に、周囲に国文研のような素晴らしい団体があることを弘めて参りたいと心から思っております。最後になりますが、ご講義下された諸先生方、今後益々日本国及び日本人のためにどうかご自愛下され、ご健康でいらして下さいませよう心よりお祈り申し上げます。

江田島のここに集ひし人々は国を思ひて緑変らず



力強い国歌斉唱の後、磯貝保博副理事長は「スポーツの後とはまた違った疲労感を覚えるのは心を労したからだ。ご家族や友人に感動を是非伝えてほしい」と挨拶した。

「公」に尽すことが私たちの幸せと教えられた

(公益財団法人モラロジー研究所 内山慶子 58歳)

姪二人と共に初めて参加させていただきました。慌ただしくも、楽しく有意義な四日間でした。江田島の美しい自然の中、若い皆様と沢山のことを学ぶことができました。

私たちの幸せは「公」に尽すことだと教えていただきました。心を寄せればごく身近にも、私にもできることがいろいろあるのだと思います。

気負わず、自分のできることを見つけ、力を注ぐことができればと思います。魂の世話をしながら、毎日を過ごして行くことと思います。

国民文化研究会のスタッフの皆様、お蔭様で楽しい四日間でございました。ありがとうございます。

江田島の美し自然に囲まれて初めての合宿楽しく終へむ

誰かが嘘をついているかもしれない

(福岡中小企業経営者協会 崔 耿美 32歳)

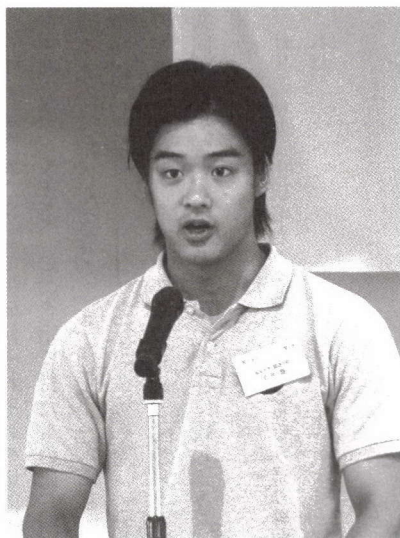
四日間の研修は、今まで日本で暮らしながら自分で一番避けたい問題を表に出させることになったと思います。

日本人と結婚して、日本社会で日本文化の影響を受けながら暮らしているので、私はある程度は日本人のように考えるようになっていて、と感じるところも多いです。異なる外国

であれば、私はこんなに悩む必要がないと思いますが、日本は韓国との近代の歴史の影があり、私は自分自身も意識していないところで、母国の価値や立場に反する発言や行動をしているのではないかと前からずっと気になっていました。それで、この研修を受ける前には、私が苦しい思いをするのではと、周囲も心配してくれました。合宿の教育内容は、終始日本人の立場からの考え方で、色んな場面で自分の主張をしたいところが沢山ありました。しかし、恥ずかしながら、私も母国のことを皆さんと議論できるほど詳しくはありません。そこで私は、植民地の直接加害者と被害者の関係を出来れば除いて、日本民族が民族のプライドを取り戻して欲しいという観点で見るように努力していました。私が半島の強い精神力を持っている韓国人として高いプライドを持っているように、世界どこの国の民族も自国の歴史にプライドを持つて欲しいからです。また日本のことばかりを見て、他の民族の事情を客観的に判断しようとしないう方もいましたが、それは韓国でも韓国人第一という、少し偏った考え方を持っている人もいるので、「そうですか」ということで済ませていました。しかし、一番私を悩ませたのは慰霊祭でした。明らかに私の国の公式的な立場に反する行事です。最初は参加しないことにしようかと思いましたが、靖国神社と同じ儀式ということ、その実態が知りたいという知的好奇心が沸いてきて、結局は出席いたしました。結果からいうと、儀式そのものは韓国とも似ていて、そこには抵抗はありませんでした。しかし

その中で私は、植民地のとき、日本人の精神を韓国人に無理やり注入しようとしたことに拒否し、殺されながらも韓国人の魂を守ろうとした祖先の気持ち、自分の魂を奪おうとする物に対する恐怖がとても良く理解できました。日本人が大和魂を守ろうとするのと同じく、私の祖先もその魂を守りたかったはずです。またその祖先の勇気が自分の血の中に流れていることに気づくことも出来ました。私は儀式をオブザーバーとして見るだけで、儀式には心を込めませんでした。形であるとしても、低頭等、礼は全然表しませんでした。むしろ独立のために若い命を国に捧げて下さった自分の祖先に感謝の気持ちを祈り続けていました。それが、自分の祖先にも、本気で儀式を行っている日本人にも礼儀を守ることだと感じていました。

私は日本の戦後教育については全然知りません。しかしそれが今までの教育と異なる価値観、立場の紹介、また日本文化を大事にする教育でしたら、国民に多様な観点から歴史を見ることを教えられるという面で勧めます。只、私も常に気をつけているところですが、反対側にも優秀な人たちが論理と証拠を持って、国のためかそれとも彼らが求める真実を達成するためか、本気で努力していることだけは認めて欲しいです。韓国も中国も日本も、領土問題に関しては素晴らしい論理と歴史的な証拠をそれぞれ持っていることは知って欲しいです。誰かが嘘をついているかもしれない、それが自分の国の政府や歴史家でないとは断言できません。全てを良く勉



「考へを深め日本人として成長したい。各地の勉強会に加はり、来年の合宿に向けて互ひに努力しよう」と福岡大学経済学部3年・松井豊君(右)が述べた後、神奈川大学法学部2年・市川絢也君(左)の閉会宣言を以て、第56回全国学生青年合宿教室は閉幕した。

強して判断して欲しいと思いました。勿論自分自身を含めてです。

心の氣を養ふことの大切さに気付かされた

(神奈川県立生田東高校 原川猛雄 63歳)

「魂の世話をする」といふ言葉は聞きなれない言葉ですが、大事なことを指摘されたと思ひます。普段の生活では忘れてゐたことにあらためて気付かされました。日常の生活で、自分の心を見つめる余裕も無く過ごしてゐたことが反省されます。ソクラテスの言ふやうに「いちばん大切なことを、いちばん粗末にし、つまらないことを、不相応に大切にしている」状態でした。

また、廣木寧先生は、「氣」を養ふことが学問をすることだとおっしゃいました。人は良い空氣を呼吸して健康を保つやうに、古典や先人のすぐれた文章や和歌に学んで、自分の心の氣を養ひ続けることが大切なことにあらためて気付かされました。

三十二班の人たちとはせっかく知り合つたので、今後とも連絡を取り合ひ交流を続けて行きたいと思ひます。いろいろありがとうございました。

全体感想発表を聞きて

つぎつぎと思ひを語る若きらの言葉を聞けば勇氣湧きくる

第四十一班—国文研—

講義や討論に集中できた

(S I S 株) 内田厳彦 65歳

今年の合宿も例年に劣らない素晴らしい講義の連続であった。今回の合宿が、自分としては今まで参加した中では講義が一番集中できたし、班別討論で、班の方々の話をよく聞くことができたやうに思ふ。それは偶々私が国文研班に属し、班長の任を負はされたことと無関係ではなく、途中、疲労も感じたが結果的には有難かつた。合宿が終りに近づいた今、合宿中の御講義、班別での研修それぞれの場面が心地よい疲れと共に甦つて来る。この合宿で得たものは、何といつても、日本人が大切にしてきた「まごころ」「公と私」を再確認させられたことであり、それを分かり易く説いて下さつた講師の方々には感謝するばかりです。又、班の方達とも三日間の共同生活を経て、永年の知己のやうに親しくなれたことも有難かつた。

江田島は友(山根清君)の御霊の護らむみ祭りの前に雨もあがれば

厳かだった慰霊祭

(元新潟工科大学教授 大岡 弘 64歳)

この度の慰霊祭は、大変厳かだった。横笛の楽の音が流れ、お二人の正装の神職様にお導きいただいた、格別のみ祭りであった。これは、大合宿の慰霊祭史上、初のころみであったと思はれる。お二人の神職様の御奉仕に恵まれる機会はめったにないであらうが、今回の慰霊祭の形は、慰霊祭の理想の姿なのであらう。心に残る美しい慰霊祭だった。

奉仕者の動きゆかしも斎服に身をつつしみて厳かなりき
み祭りに横笛の音の流れきてとりわけうるはしこよひのみ祭り

四十四年ぶりの参加で「日本への回帰」を果たした

(井原 稔 64歳)

「遠き日に阿蘇で学びし思ひ出は埋み火となりて今も残れり」私が今回の合宿に参加するのは昭和四十二年の阿蘇合宿以来四十四年ぶりのことになります。いろいろ回り道をしましたが、文字通り「日本への回帰」を果たしたとの実感を強くいたしております。

今回拝聴させていただいた御講義はいづれも胸に深く沁み込むものばかりで、あらためて学問とは人生とは祖国とは何かを深く考へる契機を与へてもらいました。申し上げるまでもなく、日本国民にとって御皇室の存在は大変尊く有難いも

のであり、このやうな日本に生を享けた仕合せをつくづく感じてをります。であるからこそ、このすばらしい国柄（文化伝統）を何としても守り抜いていかねばならないとの思ひを新たにしています。

人間は学ぶ姿勢がある限り常に学生であり青年であると思ひます。私こと日々研鑽を続けてをりますが、いまだ頭だけの理解にとどまり、腹の底まで到達してゐないことを自覚いたしてをります。諸先生や先輩各位の御指導を賜りながら更に精進を継続していきたいと考へてをります。

松陰がこの世に留めし魂は時代を導く曙光なりけり
愛をもて古事記を説きたまふ熱き思ひに心震へり

我が国の政治の混乱の本質に迫る事ができた

(駒交交通事故総合分析センター 小田村初男 61歳)

本年は東日本大震災と、それに伴ふ福島第一原子力発電所の事故といふ未曾有の大災害が発生したが、かてて加へて、その收拾に当るべき政府が、要路にある政治家が、保身などの私益のみに走り、全く機能しないといふ大変な国難の時期に合宿教室に参加した。

小堀桂一郎先生の「歴史に学ぶ『公』と『私』の関係」、國武忠彦先生の「古事記―仁徳天皇の巻―」、山内健生先生の「日本歴史の特性」を通じて、その混乱の原因の本質に迫る事ができたと思ふ。特に我国に於ける「公」と「私」の関

係について歴史を遡つての考察は、改めて目を見開かされる思ひである。

また全体感想発表では、若い学生諸君を中心に意見発表が続き、大変頼もしく、我国の将来に一縷の望みを持たせるものであった。

全体感想発表を聞きて

若きらのつぎつぎ立ちて意見のふる姿ぞまさに頼もしきかな

皇統の素晴らしさに感銘

(自衛隊東海防衛支局岐阜防衛事務所 神谷正一 51歳)

ご講義は一貫して日本の本来の姿を感じさせられる内容であり、天皇のご存在をより身近に感じられるやうになったとの感想を持つに到った参加者も多かったのではないかと思ふ。私自身も新しい事柄に多々ふれ、改めて皇統の素晴らしさに感銘を受けた。

カッター研修、慰霊祭と屋外での活動では、天候による影響が危ぶまれたが、適切な判断がなされて充実したものになったことは、殊の外嬉しく感じた。

合宿に参加する度に、日頃の不勉強を恥ぢるばかりであるが、ご講義と班別研修を通じて新たに学び得たことは、大きな収穫であった。

慰霊祭

激しかる雨もいつしか降りやみてゆにはにさはに虫の音の満つ

虫の音の満つるゆにはにさはににも横笛の音のさやかに聞こゆ

第四十二班—国文研—

大切な事柄を学んだ

(安藤奏一朗 27歳)

合宿に参加する前日まではとても緊張し頭の中も真っ白でしたが、合宿導入講義「ソクラテスと吉田松陰」における廣木寧先生の熱心なお話しぶりで不安も吹き飛びました。共に参加した弟の助けもあり、同じ班の方々にも親切にしてもらい、どの学習も楽しく意欲をもって取り組めました。カッター研修と慰霊祭は、とても良い緊張感と厳肅な気持ちを与えてくれました。短歌の導入講義と作成・全体批評・相互批評は、歌を詠むのがはじめての私はとても苦労しましたが、皆さんのお陰もあり、特に熱を入れて取り組めたと思います。全体を通して諸先生方のお話しが根底でつながり、日本の素朴さ、情感の豊かさ、連続し受けつがれるもの、天皇の恩徳など、大切な事柄を学びとる事ができました。

江田島の地にて過せしこの日々は我を大きく成長させけり

同じ気持ちの人は沢山いるのだ

（東京工業大学 院 生命理工 一年 安藤和則）

私は今、大学院修士課程で生物の再生について研究をしています。日頃会う人と日本についての事柄は殆ど話題に上ることはありません。けれども、自分の生れた国について知り、考え方を共有することは非常に大切なことであり、精神的な軸をしっかりとらせるのに必要なことだと思います。それはきつと自分の研究と向い合い外国の科学者たちとの競争に勝つ上でもなくてはならないものです。どうにかしなければならぬのに出来ずにいる気持ちは今回の合宿で大変明るいものになりました。自分の直ぐ近くにいなくとも、日本中に同じ気持ちの人は沢山いるのだということに気づいたからです。

石の日売吉備の黒日売に嫉妬して足掻きし様はほほゑまじかな

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿一日目の夜、国民文化研究会会員の寶邊矢太郎氏（山口県立熊毛南高等学校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後翌日夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きはしばしばに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のためのワープロ入力作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の折田豊生氏（国民文化研究会参与）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらしことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品

(班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録)

第一班

しむ

中央大学 文 二年 廣木摩理勢

東京大学 理 三年 高木 悠
皆の漕ぐ權の時折平行にそろひて動くは美し
かりけり

接岸し掴み続けし權をたて腕をつたふは飛沫
か汗か
福岡大学 經 一年 藤井勇太

次もまた權よそろへと念じつつ皆のブレード
見つめ漕ぎゆく

カッターを必死にこぎてつかはて岸に上が
れば心満ちくる
(株)寺子屋モデル代表取締役 山口秀範

ブレードの動きいよいよそろひきて一漕ぎ一
漕ぎリズム出で来ぬ

全身で漕げとの指示に腹筋を伸ばして応ずぎ
こちなけれど

權をひく重さに腰は浮きたれどリズム感じて
漕ぐは楽しも

隣りとの呼吸の合ひて時折は艇前進の確かな
手ごたへ

青山学院大学 社会情報 三年 鈴木 光
權こぎて憩ひて眺むる山影は初めて見たる安
芸の宮島

「權立て」の合図に憩ひて見返れば思ひがけ
ずも遠く漕ぎ来ぬ
雲間より宮島の影望みたり寝観音てふ姿さな
がら

福岡大学 經 三年 松井 豊
ソーレイの掛け声しだいに高まりて今カッ
ターはぐいと進めり

ひたむきな我らが取り組み教官も嘉すか口調
の少し和ぐ

明治大学 法 三年 岡部訓亮
雲はらひ巖かな峰に見下ろされ我は漕ぎたり
空見上げつつ

若さらに交じりて力出し切りて足腰軋めど心
満ち来る

山口大学 理 三年 廣田真樹
航跡に波立つ海を一号艇水きり進めと權握り

第二班

福岡大学 經 四年 岡松侑希

手を伸ばし足を伸ばして權を漕ぎぬ島も水面
も見る暇なく

慶応大学 院 法学研究科 一年 杠 泰介
合宿所にて

名も知らぬ廊下を往き交ふ人々に一札するは
心涼しき

拓殖大学 一年 千葉 敦
カッター研修にて

「太陽だ、太陽を見ろ。」の声を聞き全身の
けぞり漕げば楽しも

中村学園大学 流通科学 四年 岩本真明
もろともに「ソーレ」と叫びひたすらに艇を
漕ぎゆく沖へ向かひて

福岡大学 經 三年 坂口雅人

友皆と息合はせんと汗かきてただひたすらに
こぎつづけたり

埼玉大学 教養 三年 山中利郎
カッター研修で二號艇に乗りて教官より

激励さる

一號艇追ひ抜くぞとの聲聞けば權を漕ぐ手に力湧き來る

山口東京理科大学 工 二年 清藤邦彦
カッター研修にて

漕ぎ終へて体は痛く疲れしも力出し切り心満ちたる

日本青年協議会 松岡篤志
江田島の海にてカッター研修

声あはせ漕ぎゆくうちに十二本の權もそろひてカッターは進む

江田島の健児もかくして鍛へしを偲びて權を全身で漕ぐ

興銀リース(株) 小柳志乃夫
カッター研修

一人だけ見学するもつまらぬと先輩に頼みて漕ぎ手に代はりつ

太き權を捌きかねては仰向けに倒れし我を友ら助くる

大汗をかき全力で權をこぐ若き友らと力合はせて

第三班

國學院大學 文 四年 相澤 守
「走れ」との教官の聲響きわたり楽しさ消え

て身は引き締まる

權を持ち漕ぎ出でてみるも皆の息未だ合はざ

り艇は進まず

迷惑をかけてはならじと全身で皆に合はせて

權を漕ぎけり

九州工業大学 情報工 四年 大森淳史

カッター研修をやり終へて詠める

夢中にて漕ぎしがゆゑか艇おりて始めて感じぬ体のゆれを

福岡大学 法 四年 黒木教太郎

研修中まなじり決する教官も終はれば笑顔の良き人なりき

拓殖大学 経 二年 平田聖英

静かなる町を歩けば遠くより微かに聴こゆる潮騒の音

福岡大学 経 三年 大山憲哉

講義中ねむたくなれどかたはらの友におこさ

れ必死に起きぬ

専修大学 法 二年 奈良崎恵祐

「座れ」「立て」怒鳴る教官鬼のやうなれど

伝ひくその温かさ

直方高校講師 小野吉宣

カッター研修

カッター研修

カッター研修

カッター研修

は変る

両足をしかと踏んばりハンドルを前に押し出し

静かなる海の一面を声合はせかきをかきたり

カッター進む

右げんより古鷹山を眺むれば緑濃きかな 古

思ふ

若き日に広瀬中佐が幾度もかけ登りたる御姿

英雄し

(株)アルバック 北浜 道

合宿地へ向はむと新横浜駅にて新幹線を

待つ折に

開業後四十七年経るも重大の事故いまだ無く

今に至りき

中国のいたましき事故の思はれてこは奇跡か

とさへ思はれき

人々の長きに渡り続け来しまことの営みに支

へられしか

(株)HIIエアロスペース 内海勝彦

カッター研修にて

待ちをりしカッター研修始まりぬ朝より降り

し雨もあがりて

次々と出る教官の号令に我らの顔も引き締ま

りゆく

恐る恐る漕ぎ出でたれど水を切るオールの力

いまだ出でこず

教官ゆ皆の力を合はせよと言はれて発する
ソールのかけ声

水を切る皆のオールも揃ひ出し力得て進む三
号艇は

第四班

九州工業大学 院 情報工 二年 伊藤健司
教官の覇気こもりたる号令にりんとしたりて
友らは動く

鳥取大学 四年 井上翔太

江田島でのカッター研修の中間地点にて
観音にも見まがふ宮島を見て

艇上で汗をふきつつ西向けば宮島見えてほっ
としたりき

友みなも同じ思ひか嘆声を上げつつ観音を見
遣りたりけり

東京大学 院 工 二年 内海雄太郎
我々の力を集めて進みゆくカッターの姿思ひ
描かん

教官の「前へ」の声が響き渡り力を込めて皆
で漕ぎ出つ

研修が終りて友と上る坂涼しき風が頬を撫で
けり

福岡大学 経 四年 蓮尾健一

日露戦争の話を開きて

今ここに自分があるは英霊のおかけなりとふ
気持ちになりぬ

福岡大学 商 三年 三反畑 輝

「公」についてのご講義を聞きしのちの
班別研修にて、終戦時の昭和天皇のお話
を聞きて

我が身より民しづかかと思はるるその御心に
感じ入りたり

天皇を頂きし我が国柄の貴きを知りうれしく
思ふ

神奈川大学 法 二年 市川絢也

廣木寧先生

日本への熱き思ひを語りますご講義聴きて心
昂ぶる

我もまた夏の暑さも気にならぬ程にぞ熱き思
ひになりぬる

東洋紡績(株) 庭本秀一郎

厳しかる口調で号令かけらるる先生の声庫内
に響く

立つことにも座ることにも真剣に取り組むや
うに言はれ驚く

つきし手を「立て」の合図で伸ばしきり跳ね
るがごとく立ち上がりたり

胸張りてかかとを合はせ指伸ばし立てば力の

湧きて楽しき

第五班

九州工業大学 院 情報工 一年 小林達郎
沖に出て真近に見ゆる宮島は雲に煙りて麗し
きかな

山口大学 医 三年 福田裕紀
皆ともに港こぎ出づるカッターは一つの道を
進みゆくかな

北海道大学 院 情報科学 二年 飯島仁史
權を引き身を反る姿誉められてこぎゆく体に
力入るも

福岡大学 理 三年 原田真太郎
水しぶき我にかかれど耐へつとも力の限り權
を漕ぎけり

千葉大学 教育 四年 国弘大資
ひたすらにこぎつとも見る教官を六番よいぞ
とほめられたくて

九州大学 芸術工 一年 森田健太郎
もろともに息合はせつつ權漕げば水を捉へて
前へ前へと

神奈川県立水取沢高等学校 大日方 学
カッター研修の折に

号令に合はせひたすら漕ぎゆけば出でし港の

かあなたに見ゆるも

權休め彼方をみやれば宮島に雲のかかりて美

しきかな

友皆が心一つに權座栓閉めたる音の見事に合
ひたり

日本ユニシス(株)北海道支店 大町憲朗

猛々しき教官の声構内にひびきわたりにて身の

ひきしまる

全力と協力といふ目標を我らに強くさとされ
にけり

ますぐにて權立て船出するカッターの姿美し

江田島の海に

第十一班

富山大学 人間発達 四年 藪あすか

潮風を浴びてひたすらこの權で波を掻きゆく

ただ一心に

共立女子大学 文芸 三年 宮坂礼子

ひたむきに海に生きし海兵の軍歌は我の心
に響く

中村学園大学 人間発達 三年 横尾菜摘

若き日に海を護りし海兵は青年の日を思ひて
歌ふ

福岡大学 人文 三年 田中麻理

厳しさまごころもある訓練に權と心は一つ
になりゆく

聖心女子大学 教養 一年 岸 花帆里

潮の香をかき分け艇は進みゆく静けき水面に
しぶき散らして

アメリカンスクール高等学校 スクイラチォテイ茉莉葉
海の上今進みゆくカッターに我らの心は一つ
になりゆく

岸本 弘

カッター研修にて

号令に合はせ素早く動かんと思へど若きらに
遅るる吾は

吾もまたオール握れど友みなと心一つにこく

は難し

声合はせ夢中になりてこぎゆけばいつしか艇
は滑らかにゆく

第十二班

佐賀大学 文化教育 四年 吉本朋代

昔、祖父が海軍に入り江田島にありしと

聞きをりしかば

江田島の海に漕ぎ出し進みつつ当時の祖父に
思ひを馳する

福岡大学 経 三年 竹原なつ美

江田島で見知らぬ友とめぐり合ひ心通はせ語
りあはんとす

成蹊大学 四年 西形昭紀

いにしへの偉人の心を知りたりて私の心も深
く安らぐ

中村学園大学 人間発達 三年 久富玲奈

カッター研修にて

教官の気迫に押され絞りだす必死のかけ声一
つになりけり

文京学院大学 外国語 神谷静香

カッター研修を終へて
友だちと良き汗かきし帰り道清々しさに笑み
のあふるる

立命館アジア太平洋大 二年 名和裕美

伴奏につづきてうたふ君が代の声の大きにお
どろかれぬる

仙台第二高校 二年 木戸希望

カッター研修にて

海の中覗きて魚を探せども水面みづうらがきらり反射
するのみ

(株)ケイエヌラボアナリス 天本和馬

波にとられしオール戻さむと力込む漕ぎ手
の顔にあせり浮び来
さはあれど次第にオールは揃ひきてソーレの
声もたのもしく聞ゆ

声もたのもしく聞ゆ

掛声のままにオールは水とらへ心ひとつに艇を進むる

第二十一班

日本郵便大村支店郵便課 橋本公明
ソーレとのかけ声かけて海面に權入れし時力の入りぬ

今村琢弘

合宿所「朝の集ひ」にて

海山を遠くにのぞむ大空に幼なき子等と日の丸見上ぐ

福島義榮

震災の被害のさなかひとびとは沈着にして乱れず居たり

(株)福岡県中小企業経営者協会 後藤公二

幼き日祖母と旅せし思ひ出の蘇りたり原爆ドーム

(株)はせがわ 伊藤真人

体力の不安を隠しわざ向かひ權を握れば歳も忘れぬ

(株)まるぶん 嵐隆将

去年会ひし学びの友と再会し変らぬ笑顔を嬉しく思ふ

研修で力を合はせ艇を漕ぎきつくはあれど楽

しかりけり

(株)致知出版社 永廣理人

小堀桂一郎先生のご講義を聴きて

六十年の占領政策なんのその千年の歴史は揺るぎだにせず

中島法律事務所 中島繁樹

Cutter 研修にて

權先の角度悪しとくり返し叱られてをり一番手我は

重き權を持つ両腕のはや奏えて漕ぐ手遅れぬあせる気持ちに

第二十二班

(株)福岡中小企業経営者協会 古賀正博

教官の声をはげみに權漕げばソーレの気合で力湧きくる

富山市立西部中学校 北本 宏

廣木寧先生のご講義を聞きて

市ヶ谷の露ときえにしものふのその魂をいまに知るとは

旧海軍兵学校講堂・学生館を見学して

江田島に集ひ学べる若人の練磨の庭に今我は立つ

(有)次郎楽器 長崎圭作

霧の江田島にて

妻の顔思ひうかべし土産屋であれこれ迷ひ心決まらず

雨の江田島にて

あたらしき友と語りつはじめての歌をつくれどペンはすすまず

放送大學大学院 前田哲夫

いにしへの手紙を読みし参考館の我が登の静なる響

いつの間に皆とはなれてわれひとりあまたの遺品見入るまにまに

静岡県立中央特別支援学校 杉山浩二

目の前の若き学生の姿見つつ心根だけは青年になり

(株)まるぶん 多羽田 益央

Cutterを初めて行きて御対面まじめにこぐよ鬼教官殿

赤坂耕輔

ブレードをそおれと海へ叩き込めばしぶきと汗で服ぬれそる

羽後信用金庫石脇支店 須田清文

開会式にて飯島隆史運営委員長のご挨拶をききて

ふかぶかか頭をたれて合宿に集ひし人らに礼されたまひぬ

あひともいかに生きるかさぐるべくこの合宿にのぞみたしとふ

今ここにいたれる一年のいたづきのいかばかりかとしのびけるかな

教育参考館にて秋山真之の鯉の絵を見て

画用紙に筆はしらせて描きたる鯉の墨絵の勢ひ強しも

まよひなく筆走らせて今まさにはねかへるごとと鯉は泳げる

戦ひのさ中に描きし鯉の絵にみなぎる力あふれいでけり

第二十三班

日章工業(株) 樋口哲郎

息子「由珠輝」誕生

待ちに待ちし息子生まれて我が家はゆずと家族の笑みに満ちたり

古田達朗

若者に交じりて学び語らへば若き日の我に戻る心地す

福岡大学 阿比留 正弘

カッター研修に臨みて

研修の前は厳しき教官も岸にあがればやさしかりけり

(株)はせがわ 岩田敏幸
号令に一糸乱れずあいさつしたるめる心引き締まりけり

全力と協力の言葉忘れずに仲間と合せるソールのかげ声

(株)福岡中小企業経営者協会 青山晃典

カッター研修中に教官より能美島を紹介されて

艇休め父の故郷能美島見えしひとときなつかしきかな

(株)致知出版社 藤尾允泰

江田島合宿閉会式にて

國のため命捧げし英霊を偲びまつりて君が代唱ふ

ハローワーク福岡中央 古川広治

カッター研修を終へて

思はずも胸つまりくる教官と最後の礼を交へし時に

第三十一班

鶴花園 鶴 比呂子

縁ありて共に漕ぎ出す仲間らと呼吸合せて進む嬉しき

華泉書道会 坂本和代

古へのいのち流るる言の葉を習ひ伝へんと心に誓ふ

第一術科学学校の庭の一本の赤松を見て

夕立ちに洗はれし庭にまつすぐに生ふる姫松ひかり輝く

慶應義塾大学文学研究科修士一年 スクイラオチテイのり子

教育参考館にて辞世の手紙と遺影を拝しはたとせにみたぬいのちを国護ると捧げ給ひしあまたますらを

出撃に臨みてわづか三時間余しるされし文字の清らなるかな

心つよくとなげき給ふなとますらをは残れる

父母にしたため給へり 内山緑地建設(株) 内山差得子

おだやかな海に囲まれし江田島で多く学びて心満ちたり

中山佳代子

はじめてのカッター研修に臨みて

波に酔ひ弱気になりたる己が気をふきとばさんとソールと声出す

声出して力の限り漕ぎ終へて陸に上がればひざがふるへる

鳥村善子

教育参考館にて秋山真之中将の写真を拝して

あくがれし君がうつしゑ前にして思はず長き
ときをすごしぬ

待ちわびし参考館の品々は海のをこの姿映
しぬ

元小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄
はじめての命令口調の厳しさに心おのづとひ
きしまる覚ゆ

皆ともに声を合せて櫓をこげば水面すべるご
と舟すすみゆく

第三十二班

公益財団法人モラロジー研究所 内山慶子
国のため海の戦に尽くされし御魂は今も見護
り給ひぬ

難波江 紀子
国思ひたすらつとめし亡き父の学びの庭は
江田島なりき

鳥栖市立田代中学校 井上由里子
教官の「前にならえ」と号令する厳しき口調
に気を引き締めぬ

主婦 露木奈美
伊豆の海にシュノーケルをせしをりに
ヒリゾ浜透き通る海に泳ぎ行く魚の群れに我
も混りて

(社)福岡中小企業経営者協会 崔 耿美
今を捨て新たな階段登る君輝く笑顔に勇気を
もらふ

神奈川県立生田東高校 原川猛雄
廣木寧兄のご講義を聞きて

死を見つめしつかり生きよてふ父君の無言の
教へ友は語りぬ

つい前のことを忘るるわが父のことを思へば
胸迫りくる

第四十一班

S I S (株) 内田厳彦
江田島の合宿の宿の懐かしき亡き友と撮りし
写真もあり

教育参考館見学
バルチック艦隊の姿発見す塚本大佐の双眼鏡
は

皇国を救ひし双眼鏡に思はれて陳列棚に見入
りたりけり
元・東急建設常務取締役技師長 奥富修一

(二回目的作品)
山狭く海面の見えて鳴く蝉の声は満つるも学
びの庭に
聖徳の皇子の教へを説きたまふ老師のみ心有

難しくして

元新潟工科大学教授 大岡 弘
教育参考館を見学して

みいくさに殉ぜしあまたのつはもの名を刻
みたる銘牌のあり

銘牌を建ててとむらふ同窓のつはもの達の心
ゆかしも

井原 稔
四十年の時を隔ててわれはまたこの合宿に帰
り来たりぬ

江田島は若きもののふ國思ひのち燃やして
励みし島か

(勸)交通事故総合分析センター 小田村初男
江田島教育参考館を見学して

國のためかなしき命重ねたるつはものたちの
言の葉尊し
父母と血判のふみとり交はし覚悟示せるます
らをもあり

高松宮妃殿下の御歌を拝して
特攻に命捧げし益荒男を詠み賜ひたる御歌尊
し

自衛隊東海防衛支局岐阜防衛事務所 神谷正一
カッター研修を終へて
道遥歌に「共に奏でん權の歌」と歌ひし頃を
思ひ出だしぬ

朝な夕な陸トレもせし漕ぎもせし鉄腕鍛ふる
若人たらむと

かの頃のごとくに權を操らむと思ひのつれ
どかなはざりしも

第四十二班

カッター研修

山本博資

漕ぐほどに力合ひきて海の面をすべるがごと
くカッター進みぬ

江田島の沖に漕ぎ出しながむればはるか遠く
に宮島も見ゆ

(二回目の作品)

江田島の朝

古鷹の山の端しるくかはりゆき江田島の朝し
づかにあけゆく
瀬戸内の八十島見ゆる江田島のあけゆく朝の
けしき良きかな

日章工業(株) 藤新成信

カッター研修の折に

指導者の言の葉力のみなざりてゆるむ心も正
さるごと

栈橋を渡りて船に乗りこまば隣に座するはわ
が社の友なり

「何事も勉強ですから」とふ一言にて参加し
たまひしみ情を思ふ

あまたある人ら束ねる工場の長の言葉とあり
がたく拜す
人々と心合はせて漕ぎゆかば我らが船も進み
行きなむ

(二回目の作品)

ふりしきる雨もあがりて緑こき入江のかなた
に瀬戸の海見ゆ

小林 至

カッター研修

初めてのカッターを漕ぐ体験を心はづみて楽
しみに待つ

教官の命令口調の言の葉にはづむ気持ちに緊
張おほゆ

(二回目の作品)

閉会式にて

友どちと声高らかに君が代を歌ふ調べはすが
しかりけり

本田 格

小堀桂一郎先生のご講義をお聴きして

師の君の語りたまひし言の葉を聴き漏らさじ
と耳傾けり

(二回目の作品)

緑濃き江田島に来て若きらと共に学びて励み

けるかも

鳥栖市役所 西山八郎

江田島海軍兵学校の学徒を偲びて
海原と折りなす山々に囲まれて励み賜ひけむ
若きら思ふも

きびしさに耐へて心技をみがきたる若きらの
声聞こえくるがに

カッター研修

上天草総合病院 福田 誠

規則にて諦めかけし研修を若き等に交じりて
臨むは嬉し

声合せ心一つに漕ぎゆけば艇すべること勢ひ
ましぬ

若き等と力を合せ漕ぎ終へて艇おりたてはず
がしかりけり

(二回目の作品)

初めて合宿参加せし長男の国旗掲揚の役

となりて
おのづからすすみて手を挙げ旗揚げに加はる
吾子のたのもし嬉し

慰霊祭

斎庭場へと続く小暗き道脇のすず虫の声とよ
に響きぬ

江田島の海に出づればここの土地のゆかりの
安藤奏一朗

歴史俵ばれてくる
東京工業大学 院 生命理工 一年 安藤和則
教官の号令に合はせ權をこぎ出で来る力は艇
を走らす

国民文化研究会

理事長 東海ゴム工業(株)顧問 上村和男
会宿の朝
をちこちゆつどひし友のすやかな笑顔を見
るは心楽しも

八月十七日、初めて訪れし江田島合宿地
で福島義栄さんと会ふ
澤部壽孫

茨城ゆ十七時間車駆り江田島に来しとふ友と
出会ひぬ

み国今ただならぬ時国憂ふみ心惚べば胸熱く
なる

新たなる友と会ひ得し喜びを語り合ひつつさ
夜更けにけり

頼もしき友の姿に防人の歌おのづから思ひだ
さるる

副理事長 (株)伊勢利代表取締役 今林賢郁
九年前の江田島合宿を思ひ返しつづ
ま夏日のきびしき陽ざしの続きたる数日なり

きかの日の集ひは

壇上ゆ教育参考館を語りたる亡友(山根清
君)の面影今もうつつに

雷鳴をよびつつ激しくふる雨もひととき止み

ぬみたま祭りに

不思議なる現象起りしとみ友らと語り合ひた

るあの日なつかし

ふたたびもこの地に集ひて学び合ふ縁かしこ

し努め果さむ

副理事長 磯貝保博

教育参考館を見学して

真向ひて遺影のみ顔見つむれば身をも心も正

されて立つ

筆勢の力あふれり国難を救ひし人の遺文に見

入る

国のため命をかけし先人の御跡たどるは我ら

がつとめ

拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内健生

もと海軍兵学校見学

過ぎし日の国の栄光ささへたる防人あまたが

学びしはここぞ

選ばれし海の防人日に夜に励みはげみてここ

で鍛へしか

接収の苦節のりこえ学舎は変らず建てりと聞

くぞうれしき

けふの日も励む隊士ら制服の白きもげざやか
に行進しをり

(二回目)の作品

全体感想発表のをりに

壇上に立ちて思ひを語りゆく若きらの言葉に

力あふるる

言の葉はつたなかれども若きらの直くなる思

ひの伝はりてくる

あらためて学びの意欲の湧くといふ若き言

の葉うれしかりけり

中村学園大学教授 占部賢志

江田島に向ふ

辿り来て字品の港に船待てば潮風吹きてちか

らみなざる

似島を過ぎゆく先は海風きてかすめる宮島神

さびて見ゆ

雲低くかかりて淡し江田島の鳥影迫り胸は高

鳴る

呉の岬音戸の瀬戸も遠がすむゆたけき安芸の

海渡るかも

山口県立熊毛南高校教諭 寶邊矢太郎

カッター訓練所にて

裂帛の号令まちにまちたるがにききつつ若き

ら機敏に動きつ

命令の言葉短く声強く我が肚内にひびきわた

れり

なぎの海にかべるカッターに次々と乗りうつりていざともづなとかん

(二回目的作品)

故山根清を偲ぶ

江田島を思へば君がかんばせのわがまなかひにたちくもあやに

九年前みまつりの前に降りし雨ふしぎに止みき今年もまたとは

日の本のいのち護りし英霊のみそなはしますか雨は止みたる

君がみたまよかくりよになき師なき友と会ひまつれるや

昭和音楽大学 名誉教授 國武忠彦

朝風の入り来る窓の彼方には大きな船の進みゆく見ゆ

熊本市役所 廃棄物指導課 折田豊生

小堀桂一郎先生の御講義を拝聴して

この春の大地震はただの禍にてはあらざりけりと師は述べ給ふ

人は皆人と人とのつながりの中に生くるを覺ましめけりと

「私」は皆「公」に包まれてあるが我らの伝統なりと

上つ代のみおやのみことはあたたかく思はれ

て読む「おほやけ」の文字

もろともにたすけかはして生くる世の永久にこそあれと祈らるるかな

飯島隆史運営委員長に

この集ひ開かむがためひととせをみ心くだきつとめ来にけむ

忙しきなりはひならむにいとま割きつとめし日々のでいたづきを想ふ

やうやうに学びの集ひの始まりて君が笑まひの輝きて見ゆ

(二回目的作品)

全体感想自由発表を聞きて

若きらのみづみづしくもますますなることばの数々聞くがすがしき

ただならぬ御国のさまを思ふにもかかる友らのあるは嬉しき

外つ国の若きに後れず劣るなく努めたまへと祈らるるかな

若き日の直ぐなる心に立ち返り我もつとめむ力の限り

新明電材(株) 飯島隆史

四艘のカッターを見送りにて

若きらの面に緊張はしる見ゆリーダーの下知聞くひとときに

オール立て沖合目指しカッターは若きらのせ

て岸離れゆく

雨上がり波静かなる江田島の海にカッター四艘浮ぶ

カッターを漕ぐかけごゑのひびき来る山路を辿る我の耳にも

(二回目的作品)

合宿運営委員の友らに

いそがしき中にも吾をたすけたまふ友の心に頭垂れたり

I M Sグループ本部 最知浩一
第一術科学校、教育参考館を訪ねて

百年の歴史を刻む学び舎の庭に松の木雄々しくたてり

日本海太平洋のをちこちにみ国まもらむと出撃せしか

父母に最期の文を書きのこし戦ひ散りしますらを悲し

(二回目的作品)

慰霊祭の準備を行ひし折に

ふり続く雨もびたりと今やみてみたままつりを行はむとす

グラランドに定めしゆ庭にみたまらは我らと會はむとまひ降り来しか

神職のかなづる笛の音心地よく江田島の山に響きわたりぬ

元 キュービー(株) 山本伸治

日の本の礎となりし勇士らを育てし兵学校はしづもりてをり

(株)寺子屋モデル 廣木 寧

寶邊矢太郎先輩の短歌導入講義に東日本大震災に触れられる処ありて思ひ出して

詠める

宮城には佐藤氏兄弟営める水産加工の会社あるらし

中国の若きをみなら佐藤氏の工場（たぐみのには）場に技なら

ふらし

地震（なみ）のあと大津波の押し寄せて高き処に人逃げまどふ

副社長の佐藤氏はまづ中国ゆ来たりしをみならを高台（とつくにびと）にあぐ

高台（とつくにびと）に外国人を導きて佐藤氏は下る家族のもとに

佐藤氏は下り行く身を大津波にのまれるがごと身うせたまひぬ

あるは泣きあるは叫びぬ大津波に掠（さら）はれし佐藤氏の命もとめて

(二回目)の作品)

岡松侑希、高木悠両君の学生体験発表を聴きて

いくたびも試演（リハ）をば繰り返し繰り返しなる

君らの話は

おのおのも日々の学びゆ生まれたる君らの話はうましと思ふ

壇上にあがりて話せし体験は君らの生を励み進めん

北九州市立医療センター 森田仁士

江田島旧海軍兵学校校舎にて

整然と美しく並ぶ赤レンガはあまたの御霊鎮もることし

百年を超えて今なお海守る若き男（おとこ）の学舎（まなびや）なりしと

(二回目)の作品)

全体感想発表にて

声あはせ歌ひし唱歌に喜びの心あふれくと刀自は語りぬ

国おもふ心こもりしこの歌詞を若きに伝へむと言葉は強し

(株)ラック 高橋俊太郎

毎年の準備にかかり気がつけば別れの時がせまりてきたる

(株)寺子屋モデル 横畑雄基

「確率は五十%」とふ職員の言葉を聞けば不安つのりぬ

決断の時近づけどふり出せる雨は次第に強くなりける

しかれども雨止むものと信じつつカッター研修の手配すずめる

若築建設(株)九州支店 池松伸典

(二回目)の作品)

雨雲のいつしか消えて暑き陽も時折させり江田島の上に

小諸市役所商工観光課 中澤栄二

尻の皮すりむける程力入れ權を漕ぐのは楽しかりけり

アルバイトの息子と参加して一生に一度といへる経験をしたとの言葉聞け

ばうれしも

(二回目)の作品)

今は亡き母に誓ひし学びの道を江田島の地でふたたび見つけし

アサヒ飲料(株) 澤部和道

(二回目)の作品)

様々の友らの力に支へられこの合宿は毎年続きぬ

中外鋳業(株) 濱崎史嘉

セイヤーと掛け声掛けてカッターを漕げば漕ぐほど漕げなくなりぬ

新日鉄ソリューションズ(株) 鷲頭祥平

サークルで共に学びし友と会ひ話せば当時に戻る思ひす

先生と再会すれば自づから背筋の伸びて気が引き縮まる

(二回目的作品)

来年も多くの友と学ぶため今のうちより予定を立てん

アルバイト

埼玉県立進修館高等学校 普通科 吉川隆太郎
曇り空波立つ海で江田島にひびいてゐるか我
が出す声か

国立長野高専 環境都市工学科 中澤悠大
セイヤーと声出す程に笑み増して瀬戸の水面
に響く掛け声

日本大学第二高等学校 平植駿一
努力して漕ぐその先に高速船舶ばく技術の進
歩を感ず

合宿地に寄せられた歌

下関市 寶邊正久
いくさぶね出でにし内海見放けつつ若きら集
ふ合宿を思ふ
くろがねの軍艦ことごと失ひて御代の移ろひ
いまぞ身に沁む

国のいのちはすがたにことばにかがやきてい
まもありけり継がざらめやも

青森県 長内俊平

申し上ぐる言葉はあらずただ大み歌声を合は
せて稱へまつらむ

よき友を得て帰りませよき友にまさる学びの
道なかるべし

みちのくのはたての里ゆにちにちのいとなみ
はるかに偲びあげなむ

(左は御便りに謹書されました明治天皇御製
であります)

をりにふれたる (明治四十五年)

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしら
べになりもならずも

國を思ふ臣のまことは言の葉のうへにあふれ
てきこえけるかな

なすことのない終らば世に長きよはひをた
もつかひやならむ

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれ
どもまよはざりけり

東京都 小田村四郎

みいくさにゆかりも深き江田島に友ら集ひて
学びますらむ

海碧く緑いろ濃きこの島に学び語らふ友ら羨
しも

みおやより受け継ぎきたれる一すぢの道もろ
ともにまもりゆかなむ

まつりごと乱るる中に集ひ来し若き友らに幸
あれと祈る

東京都 坂東一男

猛き夏燃ゆる想ひの若者が集ひて学ぶ皇国の
絆

をちこちの友等に檄文認めて集ひませりと懐
かしの夏

若き日の体力いささか萎ゆれども記紀万葉を
学び伝へん

都城市 小柳左門

江田島に今宵集へるみ友らの面輪したしく目
に浮かびくる

久々に会ひし喜び胸にあふれ語る友らの声聞
こえくる

定めなきこの世なれどもひとすぢのまことの
道に会ふぞうれしき

國の行方定めなけれどあひとともに心合はせて
進みゆかなむ

久留米大学附設中学校高等学校教諭 名和長泰

くぐもれるみ國のすがたうるはしく教へたま
ひし師の声覚ゆ

み友らの出会ひたふとしおのがじしませみち
学ぶはじまりなりし

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過しでせうか。江田島市「国立江田島青少年交流の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早三ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、編集することは、神経、時間の掛かる作業ではありますが、お一人お一人のみづみづしい心の動きをお偲びできる、心楽しく嬉しい時間でした。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一 「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文章

の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌を作りましたが、第一回目のもは班別相互批評にて添削され、全参加者それぞれ一首以上をもれなく巻末の「短歌詠草」に収めました。また、感想文の執筆の折に作っていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。こちらの表記は全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くのご協力を頂きました。お忙しい生業の傍らご協力いただきました穴井宏明、高木雅史、濱崎史嘉、佐野宣志、の各氏に心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真はカメラマン松永和文さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によって出来上

がった「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

本年三月我が国は未曾有の大災害を被りました。しかしそれは同時に、我を忘れて他のため尽し命を落される崇高な方々を目の当たりにし、今上陛下の痛切の大御心を身に沁みて知る機を得ることもあったのでした。

合宿中も多くの講師がこのことに言及され、あらためて私は感謝と誇りで胸が一杯になり仕方ありませんでした。

私達は他にも多くの胸を打つ先人の言葉に出会へました。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と存じます。お読みの後は、是非とも班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくことができますならば、編者としてこれに過ぐる喜びはございません。

(北浜 道 記)

〔資料〕

第五十六回 “合宿教室（江田島）” 感想文集

非 売 品

平成二十三年十二月二十六日発行

編集兼発行者

社団法人 国 民 文 化 研 究 会

理事長 上 村 和 男

編集長 北 浜 道

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号

〒一五〇一〇〇一一

電 話 〇三―五四六八―六二三〇

F A X 〇三―五四六八―一四七〇

